

数 学 特 論 講 義 ノ 一 ト

(2010 年度前期)

Jordan Triple Systems

野 村 隆 昭

目次

§1.	Introduction	1
§2.	Jordan Triple System	5
§3.	Peirce 分解	10
§4.	スペクトル分解	15
§5.	JTS frames	20
§6.	Jordan 代数と JTS	25
§7.	JTS と Jordan 代数の表現	31
§8.	JTS と実 Siegel 領域	36
§9.	多項式写像のなす Lie 代数	42
§10.	Koecher–Tits の Lie 代数	48
§11.	Derivations	53
§12.	スペクトルノルム	57

§1. Introduction

まず最初に、有界対称領域の研究に3項積が自然に現れる様子を例で見よう。

$V := \text{Mat}(p \times q, \mathbb{C})$ を複素 $p \times q$ 行列のなす複素ベクトル空間とする。 V の各元 v を自然に線型写像 $\mathbb{C}^q \rightarrow \mathbb{C}^p$ (共に縦ベクトルの空間) と見る：

$$v = \begin{pmatrix} v_{11} & v_{12} & \cdots & v_{1q} \\ \vdots & & & \vdots \\ v_{p1} & v_{p2} & \cdots & v_{pq} \end{pmatrix} : \mathbb{C}^q \rightarrow \mathbb{C}^p$$

このときの v の作用素ノルムを $\|v\|$ とする： $\|v\| := \sup_{\substack{\|\xi\|=1 \\ \xi \in \mathbb{C}^q}} \|v\xi\|_{\mathbb{C}^p}$ 。有限次元空間なので、右辺の \sup は実際には \max である。

さて次で与えられる V の有界対称¹領域

$$(1.1) \quad \mathcal{D} := \{z \in V ; I_p - zz^* \gg 0\} \quad (I_p \text{ は } p \text{ 次単位行列})$$

を考える。条件は、Hermite 行列 $I_p - zz^*$ が正定値であること。従って、半正定値行列 zz^* の固有値がすべて 1 より小さいことである。あとのために次の補題を述べておこう：

補題 1.1. $z \in V$ に対して

$$I_p - zz^* \gg 0 \iff I_q - z^*z \gg 0 \iff \|z\| < 1.$$

証明. すでに述べたように

$$\begin{aligned} I_p - zz^* \gg 0 &\iff \text{半正定値行列 } zz^* \text{ の固有値はすべて } 1 \text{ より小さい} \\ &\iff \|zz^*\| < 1. \end{aligned}$$

ところで

$$\begin{aligned} \|zz^*\| &= \text{半正定値行列 } zz^* \text{ の最大固有値} \\ &= \sup_{\substack{\|\xi\|=1 \\ \xi \in \mathbb{C}^p}} |(zz^*\xi | \xi)_{\mathbb{C}^p}| = \sup_{\substack{\|\xi\|=1 \\ \xi \in \mathbb{C}^p}} \|z^*\xi\|^2 \\ &= \|z^*\|^2 \end{aligned}$$

であるから、 $\|zz^*\| < 1 \iff \|z^*\| < 1$ 。そして $\|z^*\| = \|z\|$ であるから、上の議論で z^* と z を入れ替えて逆に辿ることができて、

$$\|zz^*\| < 1 \iff \|z^*z\| < 1 \iff I_q - z^*z \gg 0$$

となって証明が終わる。 □

¹ここでは「対称」という言葉は気にしないでよい。

(1.1) の \mathcal{D} で話を続けよう.

$$I_{p,q} := \begin{pmatrix} I_p & 0 \\ 0 & -I_q \end{pmatrix}$$

とおき, \mathbb{C}^{p+q} 上の sesqui-linear form ${}^t\zeta I_{p,q} \bar{\zeta}'$ を考える. 正則行列 $g \in GL(p+q, \mathbb{C})$ でこの sesqui-linear form を不変にするもの全体を $U(p, q)$ で表す (群をなしている).

$$g \in U(p, q) \iff {}^t(g\zeta) I_{p,q} (\overline{g\zeta}') \quad (\text{for } \forall \zeta, \zeta' \in \mathbb{C}^{p+q})$$

であるから

$$g \in U(p, q) \iff {}^t g I_{p,q} \bar{g} = I_{p,q} \iff g^* I_{p,q} g = I_{p,q}.$$

行列 g を区分けして

$$g = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \quad (a \text{ は } p \times p, \quad b \text{ は } p \times q \text{ etc.})$$

とおくとき,

$$g \in U(p, q) \iff \begin{pmatrix} a^* & c^* \\ b^* & d^* \end{pmatrix} \begin{pmatrix} I_p & 0 \\ 0 & -I_q \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} I_p & 0 \\ 0 & -I_q \end{pmatrix}.$$

簡単な計算で

$$(1.2) \quad g = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in U(p, q) \iff \begin{cases} a^*a - c^*c = I_p, \\ a^*b = c^*d, \\ d^*d - b^*b = I_q. \end{cases}$$

補題 1.2. $g = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in U(p, q)$ かつ $z \in \mathcal{D}$ のとき, $cz + d$ は可逆である.

証明. 次の式を導こう: $\xi \in \mathbb{C}^q$ のとき,

$$(1.3) \quad \|(cz + d)\xi\|^2 = \|(az + b)\xi\|^2 + ((I_q - z^*z)\xi | \xi).$$

そうすると, この式から

$$(cz + d)\xi = 0 \implies ((I_q - z^*z)\xi | \xi) = 0$$

が出て, $I_q - z^*z \gg 0$ より $\xi = 0$ がいえるので, $cz + d$ は可逆ということになる.

(1.3) の証明は次の通り: まず

$$\|(cz + d)\xi\|^2 = ((z^*c^* + d^*)(cz + d)\xi | \xi).$$

ここで (1.2) を用いると

$$\begin{aligned}
(z^*c^* + d^*)(cz + d) &= z^*c^*cz + z^*c^*d + d^*cz + d^*d \\
&= z^*(a^*a - I_p)z + z^*a^*b + b^*az + I_q + b^*b \\
&= (z^*a^* + b^*)(az + b) - z^*z + I_q.
\end{aligned}$$

これより (1.3) が直ちに出る. \square

さて, 群 $U(p, q)$ は (1.1) の \mathcal{D} に次で作用する:

$$(1.4) \quad \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \cdot z = (az + b)(cz + d)^{-1}.$$

実際に $z \in \mathcal{D}$ のときに, この右辺が \mathcal{D} に属することを見てもよい. 補題 1.1 より, $\|z\| < 1$ のときに, $\|(az + b)(cz + d)^{-1}\| < 1$ を示せばよい. (1.3) において, ξ の代わりに $(cz + d)^{-1}\xi$ とおくと, $\xi' := (cz + d)^{-1}\xi$ として

$$(1.5) \quad \|\xi\|^2 = \|(az + b)(cz + d)^{-1}\xi\|^2 + ((I_q - z^*z)\xi' | \xi') \geq \|(az + b)(cz + d)^{-1}\xi\|^2.$$

これより, $\|(az + b)(cz + d)^{-1}\| \leq 1$ が出る. ここで $\|(az + b)(cz + d)^{-1}\| = 1$ ならば, 単位ベクトル $\xi_0 \in \mathbb{C}^q$ が存在して, $\|(az + b)(cz + d)^{-1}\xi_0\| = 1$ となる. そうすると, (1.5) の不等号が等号になるので, $\xi'_0 := (cz + d)^{-1}\xi_0$ として, $((I_q - z^*z)\xi'_0 | \xi'_0) = 0$ を得る. $I_q - z^*z \gg 0$ より $\xi'_0 = 0$, 従って $\xi_0 = 0$ という矛盾を得る. \square

そして (1.4) が作用になっていることは容易に確かめられる:

- (1) $g_1g_2 \cdot z = g_1 \cdot (g_2 \cdot z)$,
- (2) $e \cdot z = z$ ($e := I_{p+q} \in U(p, q)$ は単位元).

さて, $\mathfrak{u}(p, q) := \text{Lie } U(p, q)$ を $U(p, q)$ の Lie 代数とする.

$$X \in \text{Mat}(p + q, \mathbb{C}) \text{ が } \mathfrak{u}(p, q) \text{ に属する} \iff \exp tX \in U(p, q) \quad (\forall t \in \mathbb{R})$$

より,

$$X \in \mathfrak{u}(p, q) \iff X^*I_{p,q} + I_{p,q}X = 0.$$

$X = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ とおくとき, 簡単な計算により

$$\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in \mathfrak{u}(p, q) \iff \begin{cases} a^* = -a, \\ c = b^*, \\ d^* = -d. \end{cases}$$

従って

$$\mathfrak{k} := \left\{ \begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{pmatrix} ; a, b \text{ は skew-Hermitian} \right\},$$

$$\mathfrak{p} := \left\{ \begin{pmatrix} 0 & v \\ v^* & 0 \end{pmatrix} ; v \in V \right\}$$

とおくと, $\mathfrak{u}(p, q) = \mathfrak{k} + \mathfrak{p}$ である. $\mathfrak{u}(p, q)$ の元は \mathcal{D} 上の正則ベクトル場を定義している. 実際 $t \in \mathbb{R}$ として

$$\exp t \begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \exp ta & 0 \\ 0 & \exp tb \end{pmatrix}$$

より

$$\left[\exp t \begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{pmatrix} \right] \cdot z = (\exp ta)z(\exp tb)^{-1}$$

であるから, $t = 0$ で微分して

$$\begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{pmatrix} \cdot z = az - zb.$$

また

$$\exp t \begin{pmatrix} 0 & v \\ v^* & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 + O(t^2) & tv + O(t^3) \\ tv^* + O(t^3) & 1 + O(t^2) \end{pmatrix}$$

であるから, $|t|$ が十分小さいとき

$$\begin{aligned} \left[\exp t \begin{pmatrix} 0 & v \\ v^* & 0 \end{pmatrix} \right] \cdot z &= (z + tv + O(t^2))(1 + tv^*z + O(t^2))^{-1} \\ &= (z + tv + O(t^2))(1 - tv^*z + O(t^2)) \\ &= z + t(v - zv^*z) + O(t^2). \end{aligned}$$

$t = 0$ で微分して

$$\begin{pmatrix} 0 & v \\ v^* & 0 \end{pmatrix} \cdot z = v - zv^*z.$$

$Q(z)v := zv^*z$ とおくと, z については斉次2次 (従って, $\forall z \in V$ で意味を持つ), v に関しては反正則である. 2次の部分を polarize して

$$(1.6) \quad Q(x, z) := \frac{1}{2}(Q(x+z) - Q(x) - Q(z))$$

とおくと

$$Q(x, z)v = \frac{1}{2}(xv^*z + zv^*x).$$

以上のようにして, $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{C})$ に3項積が現れる.

一般に, $V \equiv \mathbb{C}^N$ の円形な有界対称領域を \mathcal{D} とする. ここで \mathcal{D} が円形であるとは, $0 \in \mathcal{D}$ であり, $z \in \mathcal{D}$ のとき, $\forall \theta \in \mathbb{R}$ に対して $e^{i\theta}z \in \mathcal{D}$ となることである.

$G := \text{Hol}(\mathcal{D})^\circ$ を, \mathcal{D} の正則同相写像全体のなす Lie 群の単位元の連結成分とする. G は中心が trivial の半単純 Lie 群である. G の Lie 代数を \mathfrak{g} とする. \mathfrak{g} の元は \mathcal{D} 上の正則ベクトル場である. K を G における原点 0 の固定部分群とする: $K := \{g \in G; g \cdot 0 = 0\}$. K は G の極大コンパクト群である. $\mathfrak{k} := \text{Lie}(K)$ (K の Lie 代数) とし, $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} + \mathfrak{p}$ を \mathfrak{g} の Cartan 分解とする. $\mathcal{D} \cong G/K$ より, $\mathfrak{p} \ni X \mapsto X(0) \in V$ は実線型同型であるので, その逆写像を $V \ni v \mapsto X_v \in \mathfrak{p}$ とする. 先の例では, $\mathfrak{p} \ni \begin{pmatrix} 0 & v \\ v^* & 0 \end{pmatrix} \mapsto v \in V$, あるいはベクトル場 $z \mapsto z - zv^*z$ と $v \in V$ との間の実線型同型写像のことである.

命題 1.3. $v - X_v(z)$ は z に関して 2 次斉次 (従って $\forall z \in V$ で意味を持つ), かつ v に関して反線型.

従って, $v - X_v(z) = Q(z)v$ とおき, $Q(x, z)$ を (1.6) で定義すると, V での 3 項積が次で定義できることになる:

$$\{x, y, z\} := Q(x, z)y.$$

§2. Jordan Triple System

以下 V は \mathbb{K} ($\mathbb{K} = \mathbb{R}$ or \mathbb{C}) 上のベクトル空間とする (当面は無有限次元でも可). 定義. V に 3 項積と呼ばれる 3 重線型写像 $\{ \cdot, \cdot, \cdot \} : V \times V \times V \rightarrow V$ が与えられていて, 次の (1), (2) が任意の $x, y, z, a, b \in V$ に対してみたされているとする:

$$(1) \{x, y, z\} = \{z, y, x\},$$

$$(2) \{a, b, \{x, y, z\}\} = \{\{a, b, x\}, y, z\} - \{x, \{b, a, y\}, z\} + \{x, y, \{a, b, z\}\}.$$

このとき, 対 $(V, \{ \cdot, \cdot, \cdot \})$ (あるいは単に V) を **Jordan triple system** (略して **JTS**) という. また (2) を **JT identity** と呼ぶ.

例 2.1. $V := \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ とし, V に次で 3 項積を定義する:

$$\{x, y, z\} := \frac{1}{2}(x^t y z + z^t y x).$$

JTS の定義における (1) は明らかである. (2) の検証は演習: 両辺とも次式に等しい:

$$\frac{1}{4}(a^t b x^t y z + a^t b z^t y x + x^t y z^t b a + z^t y x^t b a).$$

また

$$\begin{aligned} (x \square P(a)x)y &= \{x, \{a, x, a\}, y\} \\ &= -\{x, a, \{x, a, y\}\} + \{\{x, a, x\}, a, y\} + \{x, a, \{x, a, y\}\} \\ &= (P(x)a \square a)y \end{aligned}$$

となって証明が終わる. □

定義. 元 $x \in V$ の奇数乗を次で帰納的に定義する:

$$x^1 := x, \quad x^{2k+1} := (x \square x)x^{2k-1} \quad (k = 1, 2, \dots).$$

特に $x^3 = \{x, x, x\} = P(x)x$ であるが, 命題 2.2 (1) よりわかる

$$(2.2) \quad [x \square x, P(x)] = 0$$

を用いることで, 次の演習が帰納法で簡単に証明できる.

演習: $x \in V$ のとき, $x^{2k+1} = P(x)^k x$ ($k = 0, 1, 2, \dots$).

命題 2.3. $x \in V$ のとき, $x^p \square x^q$ (p, q は正奇数) は, $p + q = m$ のみに依存する. すなわち, $m = 2n$ が偶数のとき

$$x^{2n-1} \square x = x^{2n-3} \square x^3 = \dots = x \square x^{2n-1}.$$

まず次の補題から示そう.

補題 2.4. $x \in V$ のとき, $[x^{2k+1} \square x, x \square x] = 0$ ($k = 0, 1, 2, \dots$).

証明. $k = 0$ のときは trivial. $k = 1$ のときを示すために, 命題 2.2 (2) で $a = x$ とおくと.

$$x^3 \square x = 2(x \square x)^2 - P(x)^2.$$

ゆえに (2.2) より, $[x^3 \square x, x \square x] = 0$ である.

さて $k \geq 2$ とし, $x^{2k-3} \square x$ と $x^{2k-1} \square x$ が $x \square x$ と可換であると仮定する. このとき, 命題 2.2 (2) で, x の代わりに $x + y$ ($y \in V$) とおくと

$$(P(x+y)a) \square a = 2(x \square a + y \square a)^2 - P(x+y)P(a).$$

$P(x+y) = P(x) + 2P(x, y) + P(y)$ に注意すると

$$(2.3) \quad (P(x, y)a) \square a = (x \square a)(y \square a) + (y \square a)(x \square a) - P(x, y)P(a)$$

を得る. ここで $y = x^{2k-1}$, $a = x$ とおくと, 左辺は $x^{2k+1} \square x$ に等しい. 一方, 右辺は

$$(x \square x)(x^{2k-1} \square x) + (x^{2k-1} \square x)(x \square x) - P(x^{2k-1}, x)P(x)$$

に等しい. 最後の項について, 演習と命題 2.2 (1) より (a を x とし, x を x^{2k-3} とする)

$$P(x^{2k-1}, x)P(x) = P(P(x)x^{2k-3}, x)P(x) = P(x)(x^{2k-3} \square x).$$

ゆえに (2.3) は

$$x^{2k+1} \square x = (x \square x)(x^{2k-1} \square x) + (x^{2k-1} \square x)(x \square x) - P(x)(x^{2k-3} \square x)P(x)$$

となって, 帰納法の仮定と (2.2) により, $x \square x$ と可換である. \square

命題 2.3 の証明. $n = 1$ のとき, 証明すべき事は何もない. n のとき命題が成り立つと仮定する. すなわち

$$x^p \square x^{2n-p} = x^{2n-1} \square x \quad (p = 1, 3, \dots, 2n-1)$$

が成り立つと仮定する. このとき, この仮定と補題から, $p = 1, 3, \dots, 2n-1$ に対して

$$\begin{aligned} 0 &= [x \square x, x^p \square x^{2n-p}] = ((x \square x)x^p) \square x^{2n-p} - x^p \square ((x \square x)x^{2n-p}) \\ &= x^{p+2} \square x^{2n-p} - x^p \square x^{2(n+1)-p}. \end{aligned}$$

これは $x^p \square x^{2(n+1)-p} = x^{2(n+1)-1} \square x$ ($p = 1, 3, \dots, 2n+1$) を意味するから証明終わり. \square

Algebra のときはべき等元 (idempotent) が重要な働きをするが, 3項積においては, tripotent がその代わりをする.

定義. $c \in V$ が **tripotent** であるとは, $c^3 = c$ が成り立つとき.

例 2.5. $V := \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ とする. 典型的な tripotent として $c = E_{ij}$ ((i, j) 行列単位) がある. 実際

$$c^3 = E_{ij} {}^t E_{ij} E_{ij} = E_{ij} E_{ji} E_{ij} = E_{ij}.$$

V の各元を, 自然に線型写像 $\mathbb{R}^q \rightarrow \mathbb{R}^p$ と見よう. \mathbb{R}^q の自然な基底を e_1, \dots, e_q , \mathbb{R}^p の自然な基底を f_1, \dots, f_p とする. いずれもただ一つの成分のみ 1, 他の成分は 0 であるような縦ベクトルである.

$$E_{ij} e_j = f_i, \quad E_{ij} e_k = 0 \quad (k \neq j)$$

であるから, $E_{ij} : \mathbb{R}e_j \rightarrow \mathbb{R}f_i$ は等長写像であり, $(\mathbb{R}e_j)^\perp$ 上では零写像である.

線型写像 $T : \mathbb{R}^q \rightarrow \mathbb{R}^p$ が部分的等長写像 (partial isometry) であるとは, \mathbb{R}^q の部分空間 E と, \mathbb{R}^p の部分空間 F が存在して, T は E から F の上への等長写像であり, E^\perp 上では T は零写像になることである. E のことを T の始空間, F のことを T の終空間という. 先の説明から, E_{ij} は $\mathbb{R}e_j$ を始空間とし, $\mathbb{R}f_i$ を終空間とする partial isometry である.

さてこの例では一般に

$$T \in V \text{ が tripotent} \iff T \text{ は部分的等長写像.}$$

証明. まず $T \in V$ が tripotent であるとしよう. このとき, $T^t T T = T$ である. $P := T^t T$, $Q := {}^t T T$ とおくと, $P : \mathbb{R}^p \rightarrow \mathbb{R}^p$, $Q : \mathbb{R}^q \rightarrow \mathbb{R}^q$ であって, ${}^t P = P$, ${}^t Q = Q$ をみたま. さらに

$$P^2 = T^t T T T^t T = T^t T = P, \quad Q^2 = {}^t T T {}^t T T = {}^t T T = Q.$$

以上より, P, Q は直交射影作用素である. $E := Q(\mathbb{R}^q)$, $F := P(\mathbb{R}^p)$ とおく. $T = P T$ かつ $P = T^t T$ より, $T(\mathbb{R}^q) = F$ であり, $x \in E$ のとき,

$$\|Tx\|^2 = \langle Tx | Tx \rangle = \langle {}^t T T x | x \rangle = \langle Qx | x \rangle = \langle x | x \rangle = \|x\|^2$$

より, $T : E \rightarrow F$ は上への等長写像である. さらに $T = T Q$ より, T は E^\perp 上零写像である.

逆に T が partial isometry であるとき, $E \subset \mathbb{R}^q$, $F \subset \mathbb{R}^p$ をそれぞれ T の始空間と終空間とする. また E への直交射影作用素を Q とする. 任意の $x \in \mathbb{R}^q$ を $x = x_0 + x'$ ($x_0 \in E$, $x' \in E^\perp$) と表すと, $x_0 = Qx$ であり, $Tx' = 0$ より $Tx = Tx_0 = TQx$ である. そうすると

$$\langle {}^t T T x | x \rangle = \|Tx\|^2 = \|Tx_0\|^2 = \|x_0\|^2 = \|Qx\|^2 = \langle Qx | x \rangle.$$

x の代わりに $x + y$ ($y \in \mathbb{R}^q$) とおいて整理すると, $\langle {}^t T T x | y \rangle = \langle Qx | y \rangle$ を得る. ゆえに $Q = {}^t T T$ であって, $T^t T T = T Q = T$ となって, T は tripotent である.

§3. Peirce 分解

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を JTS とし, $\dim V < \infty$ を仮定する.

補題 3.1. $c \in V$ を tripotent とする.

- (1) $P(c)^3 = P(c)$.
- (2) 作用素 $c \square c$ の固有値は高々 $0, \frac{1}{2}, 1$ である.

証明. 命題 2.2 より

$$\begin{cases} P(c)(c \square c) = P(c) = (c \square c)P(c) & \cdots (a) \\ c \square c = 2(c \square c)^2 - P(c)^2 & \cdots (b) \end{cases}$$

- (1) 等式 (b) に右から $P(c)$ をかけると

$$P(c)^3 = 2(c \square c)^2 P(c) - (c \square c)P(c) \stackrel{(a)}{=} P(c).$$

- (2) 等式 (b) に右から $c \square c$ をかけると

$$\begin{aligned} (c \square c)^2 &= 2(c \square c)^3 - P(c)^2(c \square c) \stackrel{(a)}{=} 2(c \square c)^3 - P(c)^2 \\ &\stackrel{(b)}{=} 2(c \square c)^3 - 2(c \square c)^2 + c \square c. \end{aligned}$$

ゆえに $2(c \square c)^3 - 3(c \square c)^2 + c \square c = 0$. 左辺を因数分解すれば

$$(c \square c)(2c \square c - I)(c \square c - I) = 0$$

を得る. これより (2) の主張が出る. □

以下, tripotent c に対して, $c \square c$ の k 固有空間を $V_k(c)$ ($k = 0, \frac{1}{2}, 1$) で表す:

$$V_k(c) := V(c \square c, k) \quad (V_k(x) = \{0\} \text{ も許す}).$$

$V_k(c)$ のことを, tripotent c に関する **Peirce** k 空間と呼ぶ. また

$$V = V_0(c) + V_{\frac{1}{2}}(c) + V_1(c)$$

を, tripotent c に関する V の **Peirce** 分解と呼ぶ.

例 3.2. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ で考える. $1 \leq k \leq \min(p, q)$ をみたす k を一つ固定して $c := E_{11} + \cdots + E_{kk}$ とおく (E_{jj} は (j, j) 行列単位). 明らかに c は tripotent で

ある. このときの Peirce 空間はそれぞれ

$$\begin{aligned} V_1(c) &= \left(\frac{\text{Mat}(k \times k, \mathbb{R})}{0} \mid \frac{0}{0} \right), \\ V_{\frac{1}{2}}(c) &= \left(\frac{0}{\text{Mat}((p-k) \times k, \mathbb{R})} \mid \frac{\text{Mat}(k \times (q-k), \mathbb{R})}{0} \right), \\ V_0(c) &= \left(\frac{0}{0} \mid \frac{0}{\text{Mat}((p-k) \times (q-k), \mathbb{R})} \right). \end{aligned}$$

話を一般の JTS に戻そう. JT identity から, Peirce 空間どうしの次の乗積ルールがわかる: $m \neq 0, \frac{1}{2}, 1$ のとき, $V_m(c) = \{0\}$ と約束して

$$(3.1) \quad \{V_i(c), V_j(c), V_k(c)\} \subset V_{i-j+k}(c).$$

系 3.3. c を tripotent とする.

$$(1) P(c)|_{V_0(c)+V_{1/2}(c)} = 0.$$

$$(2) P(c) \text{ は } V_1(c) \text{ 上 involutive である: } (P(c)|_{V_1(c)})^2 = \text{Id}_{V_1(c)}.$$

証明. (1) 補題の証明中の (a) よりすぐにわかる.

(2) 補題の証明中の (b) よりすぐにわかる.

例 3.4. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ で, $c = E_{11} + \cdots + E_{kk}$ のとき.

$x \in V$ を $x = x_0 + x_{1/2} + x_1$ ($x_j \in V_j(c); j = 0, \frac{1}{2}, 1$) と表すと,

$$P(c)(x_0 + x_{1/2} + x_1) = {}^t x_1$$

となる.

定義. JTS V において, $\text{tr}(x \square y)$ が V に正定値内積を与えるとき, V は正定値であるという.

例 3.5. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ は正定値 JTS である. まず V に $\langle x | y \rangle_{\text{tr}} := \text{tr}({}^t x y)$ で内積を入れよう. これは $V \cong \mathbb{R}^{p \times q}$ と見なしたときの標準内積である. 従ってまた $\langle x | y \rangle_{\text{tr}} = \text{tr}(y {}^t x)$ でもある. このとき, 行列単位 $E_{ij} \in V$ ($1 \leq i \leq p, 1 \leq j \leq q$) は V の正規直交基底をなし

$$\text{tr}(x \square y) = \sum_{i,j} \langle (x \square y) E_{ij} | E_{ij} \rangle_{\text{tr}}.$$

ここで $(x \square y) E_{ij} = \frac{1}{2}(x {}^t y E_{ij} + E_{ij} {}^t y x)$ であるから

$$\text{tr}(x \square y) = \frac{1}{2} \sum_{i,j} \text{tr}({}^t E_{ij} y {}^t x E_{ij}) + \frac{1}{2} \sum_{i,j} \text{tr}({}^t x y {}^t E_{ij} E_{ij})$$

ここで $E_{ij} {}^t E_{ij}$ は $p \times p$ 行列としての (i, i) 行列単位, ${}^t E_{ij} E_{ij}$ は $q \times q$ 行列としての行列単位に等しいから

$$\mathrm{tr}(x \square y) = \frac{q}{2} \mathrm{tr}(y {}^t x) + \frac{p}{2} \mathrm{tr}({}^t x y) = \frac{p+q}{2} \langle x | y \rangle_{\mathrm{tr}}.$$

ゆえに $V = \mathrm{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ は正定値 JTS である.

以下 V は正定値 JTS とし, $\langle x | y \rangle := \mathrm{tr}(x \square y)$ とおく. JT identity

$$[a \square b, x \square y] = ((a \square b)x) \square y - x \square ((b \square a)y)$$

の両辺を trace をとると,

$$\langle (a \square b)x | y \rangle = \langle x | (b \square a)y \rangle$$

を得る. これは $(a \square b)^* = b \square a$ であることを示している. 特に任意の $x \in V$ に対して, $x \square x$ は自己共役である. 従って $x \square x$ の固有値はすべて実数である.

命題 3.6. 任意の $x \in V$ に対して, 自己共役作用素 $x \square x$ は半正定値である (固有値はすべて非負).

証明. $\lambda_1, \dots, \lambda_m$ を作用素 $x \square x$ の相異なる固有値とし, $V_j := V(x \square x, \lambda_j)$ を λ_j に対応する $x \square x$ の固有空間とする. このとき $V = \sum_{j=1}^m V_j$ であり, 従って

$x = \sum_{j=1}^m x_j$ と表す. 定義より

$$x^3 = (x \square x)x = \sum_{j=1}^m \lambda_j x_j.$$

ここで次の補題が必要である.

補題 3.7. (1) $i \neq j$ ならば, $x_i \square x_j = 0$.

(2) $x_j^3 = \lambda_j x_j$.

証明. (1) 各 $i = 1, \dots, m$ に対して, $\varphi_i(t) := \prod_{j \neq i} (t - \lambda_j) \in \mathbb{R}[t]$ を考え, $\tilde{\varphi}_i(t) := t\varphi_i(t^2)$ とおく. 明らかに $\tilde{\varphi}_i(t)$ は奇数乗のみの多項式なので, t に x を代入して $\tilde{\varphi}_i(x)$ を考えることができる.

$$x^{2k+1} = (x \square x)^k x = \sum_{j=1}^m \lambda_j^k x_j$$

であり, $\varphi_i(t) = \sum a_k t^k$ ($a_k \in \mathbb{R}$) なら $\tilde{\varphi}_i(t) = \sum a_k t^{2k+1}$ であるから

$$\begin{aligned}\tilde{\varphi}_i(x) &= \sum_k a_k x^{2k+1} = \sum_k a_k \sum_{j=1}^m \lambda_j^k x_j \\ &= \sum_{j=1}^m \left(\sum_k a_k \lambda_j^k \right) x_j = \sum_{j=1}^m \varphi_i(\lambda_j) x_j \\ &= \left[\prod_{j \neq i} (\lambda_i - \lambda_j) \right] x_i.\end{aligned}$$

従って

$$\psi_i(t) := \frac{\tilde{\varphi}_i(t)}{\prod_{j \neq i} (\lambda_i - \lambda_j)} \in \mathbb{R}[t]$$

とおくと, $x_i = \psi_i(x)$ となる. とくに x_i は x の多項式で書けるので, 命題 2.3 より $x_i \square x_j = x_j \square x_i$ となる. さらに JT identity より, 任意の $k = 1, \dots, m$ と任意の $u \in V_k$ に対して

$$(x \square x)\{x_i, x_j, u\} = (\lambda_i - \lambda_j + \lambda_k)\{x_i, x_j, u\}.$$

これは

$$(x_i \square x_j)(V_k) \subset V(x \square x, \lambda_i - \lambda_j + \lambda_k)$$

を意味する. さて, $x_i \square x_j = x_j \square x_i$ であり, それが零作用素でなかったら, どのかの V_k 上で零作用素ではない. その k について $u \in V_k$ を選んで $(x_i \square x_j)u \neq 0$ の固有値を考えると,

$$\lambda_i - \lambda_j + \lambda_k = \lambda_j - \lambda_i + \lambda_k$$

が成り立たないといけませんが, これより $\lambda_i = \lambda_j$ を得るので矛盾である. ゆえに $x_i \square x_j = 0$ である.

(2) 定義より $(x \square x)x_j = \lambda_j x_j$ であるが, 左辺について, (1) より

$$\begin{aligned}(x \square x)x_j &= \sum_{p,q} (x_p \square x_q)x_j = \sum_p (x_p \square x_p)x_j \\ &= \sum_p (x_j \square x_p)x_p = (x_j \square x_j)x_j \\ &= x_j^3.\end{aligned}$$

ゆえに $x_j^3 = \lambda_j x_j$ である. □

補題 3.8. $a \in V$, $a \neq 0$ かつ $a^3 = \lambda a$ ならば $\lambda > 0$ である.

証明. 命題 2.2 (2) より

$$\lambda a \square a = a^3 \square a = 2(a \square a)^2 - P(a)^2. \quad (*)$$

両辺に右から $a \square a$ とかけると

$$\begin{aligned} \lambda(a \square a)^2 &= 2(a \square a)^3 - P(a)^2(a \square a) \\ &= 2(a \square a)^3 - P(a)P(a^3, a) \quad (\text{命題 2.2 (1) による}) \\ &= 2(a \square a)^3 - \lambda P(a)^2 \\ &\stackrel{(*)}{=} 2(a \square a)^3 + \lambda^2 a \square a - 2\lambda(a \square a)^2. \end{aligned}$$

ゆえに $2(a \square a)^3 - 3\lambda(a \square a)^2 + \lambda^2 a \square a = 0$. 左辺を因数分解すれば

$$(a \square a)(2a \square a - \lambda I)(a \square a - \lambda I) = 0$$

となるから, $a \square a$ の固有値は高々 $0, \frac{1}{2}\lambda, \lambda$ である. ゆえに

$$0 < \|a\|^2 = \text{tr}(a \square a) = \alpha \lambda \quad (\text{for some } \alpha \geq 0).$$

ゆえに $\lambda > 0$ である.

さて命題 3.6 の証明に戻ろう. 補題 3.7 と補題 3.8 により, $x_j \neq 0$ ならば $\lambda_j > 0$ である, そのような j について $c_j := \frac{1}{\sqrt{\lambda_j}} x_j$ とおくと

$$c_j^3 = \frac{1}{\lambda_j^{3/2}} x_j^3 = \frac{1}{\lambda_j^{1/2}} x_j = c_j$$

となり, c_j は tripotent である. このとき

$$x = \sum_{j=1}^m x_j = \sum_{x_j \neq 0} \sqrt{\lambda_j} c_j$$

となり

$$x \square x = \sum_{x_j \neq 0} \lambda_j (c_j \square c_j)$$

は半正定値である. □

§4. スペクトル分解

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値な JTS とする. そして, V の内積 $\langle x|y \rangle := \text{tr}(x \square y)$ をとっておく.

定義. $c, d \in V$ を tripotents とする. $c \square d = 0$ (零作用素) のとき, c, d は直交するという.

注意. (1) $d \square c = (c \square d)^*$ であるから, 「 $c \square d = 0 \iff d \square c = 0$ 」に注意.

(2) c, d が直交する tripotents なら

$$\langle c|d \rangle = \text{tr}(c \square d) = 0$$

となって, c, d は内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ に関して直交している (特に c, d は 1 次独立である). しかし逆は一般には成立しない.

たとえば $V = \text{Mat}(2 \times 2, \mathbb{R})$ で考える. $\{x, y, z\} := \frac{1}{2}(x^t y z + z^t y x)$ で正定値な JTS になっている. 内積は $\langle x|y \rangle = 2 \text{tr}({}^t x y)$ である.

$$c := \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad d := \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$$

は tripotents である. ${}^t c d = 0$ であるから, $\langle c|d \rangle = 0$ である. 一方で,

$$c {}^t d = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} = {}^t d, \quad {}^t d c = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} = 0$$

であるから, $(c \square d)x = \frac{1}{2} {}^t d x$. ゆえに $c \square d$ は零作用素ではない.

各 $v \in V$ に対して,

$$\mathbb{R}[v] := \text{span}\{v, v^3, \dots\} \quad (v \text{ の奇数乗で張られる } V \text{ の部分空間})$$

とおく.

定理 4.1 (スペクトル分解). $v \in V$ とする. このとき, 互いに直交する non-zero tripotents $c_1, \dots, c_m \in \mathbb{R}[v]$ と, $0 < \lambda_1 < \dots < \lambda_m$ が存在して,

$$v = \sum_{j=1}^m \lambda_j c_j \quad (*)$$

と表される. この表示は一意的で, v のスペクトル分解と呼ぶ. $\lambda_1, \dots, \lambda_m$ を x の固有値と呼ぶ.

証明. $\mu_1, \dots, \mu_m (\geq 0)$ を $v \square v$ の固有値とし, 対応する固有空間を V_1, \dots, V_m とする. $v = \sum_{j=1}^m v_j$ と表すとき, §3 の結果 (命題 3.6 とその証明) より, $v_j \neq 0$ である

ような j に対して, $c_j := \frac{v_j}{\sqrt{\mu_j}}$ とおくと, これらの c_j は互いに直交する tripotents である. そして $\lambda_j := \sqrt{\mu_j}$ とおくと $v = \sum_{v_j \neq 0} \lambda_j c_j$ と表せた. $v_j \neq 0$ のとき, $\lambda_j > 0$ も §3 で示した. 表示 (*) の一意性のみ問題.

主張 1. 一般に (*) の表示があるとき (前節の構成は忘れる), $c_j \in \mathbb{R}[v]$ であり, c_1, \dots, c_m は $\mathbb{R}[v]$ の基底である.

主張 1 の証明. $(v \square v)v = \sum \lambda_j^3 c_j$, 従って

$$(4.1) \quad v^{2k-1} = (v \square v)^{k-1} v = \sum_{j=1}^m \lambda_j^{2k-1} c_j.$$

ここで, 行列

$$\Phi := \begin{pmatrix} \lambda_1 & \lambda_2 & \dots & \lambda_m \\ \lambda_1^3 & \lambda_2^3 & \dots & \lambda_m^3 \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ \lambda_1^{2m-1} & \lambda_2^{2m-1} & \dots & \lambda_m^{2m-1} \end{pmatrix}$$

を考えると, (4.1) より

$$(4.2) \quad \begin{pmatrix} v \\ v^3 \\ \vdots \\ v^{2m-1} \end{pmatrix} = \Phi \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_m \end{pmatrix}$$

と表せる. ここで

$$\det \Phi = \lambda_1 \dots \lambda_m \det \begin{pmatrix} 1 & 1 & \dots & 1 \\ \lambda_1^2 & \lambda_2^2 & \dots & \lambda_m^2 \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ \lambda_1^{2(m-1)} & \lambda_2^{2(m-1)} & \dots & \lambda_m^{2(m-1)} \end{pmatrix}.$$

であるが, 次の補題にいう Vendermonde の行列式により, $\det \Phi \neq 0$. すなわち Φ は可逆である.

補題 4.2 (Vandermonde の行列式).

$$\det \begin{pmatrix} 1 & 1 & \dots & 1 \\ x_1 & x_2 & \dots & x_n \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ x_1^{n-1} & x_2^{n-1} & \dots & x_n^{n-1} \end{pmatrix} = (-1)^{\frac{n(n-1)}{2}} \prod_{i < j} (x_i - x_j)$$

従って (4.2) から c_1, \dots, c_m が解けて, v の奇数べきの多項式で表されることになる. ゆえに各 $j = 1, \dots, m$ について, $c_j \in \mathbb{R}[v]$ である. c_1, \dots, c_m は 1 次独立なので, これらの c_j が $\mathbb{R}[v]$ の基底になることは明らか.

さて(*)ともう一つ, $0 < \mu_1 < \dots < \mu_l$ と直交する non-zero tripotents d_1, \dots, d_l によって,

$$v = \sum_{k=1}^l \mu_k d_k$$

と表されたとする. 主張 1 により, d_1, \dots, d_l は $\mathbb{R}[v]$ の基底になるから, $l = m$ である. さて $d_k = \sum_{j=1}^m \beta_{kj} c_j$ とする. $d_k^3 = d_k$ より, $\beta_{kj}^3 = \beta_{kj}$. ゆえに $\beta_{kj} = 0, \pm 1$. $d_k \neq 0$ であるから

$$(4.3) \quad \forall k \text{ に対して, } \exists j \text{ such that } \beta_{kj} \neq 0$$

そして $k_1 \neq k_2$ のとき

$$0 = d_{k_1} \square d_{k_2} = \sum_{j=1}^m \beta_{k_1 j} \beta_{k_2 j} (c_j \square c_j).$$

$c_1 \square c_1, \dots, c_m \square c_m$ は 1 次独立であるから (c_j に作用させてみよ),

$$(4.4) \quad \beta_{k_1 j} \beta_{k_2 j} = 0 \quad (\text{for } \forall j).$$

(4.3) と (4.4) より

$\forall k$ に対して, ただ一つ j があって, $\beta_{kj} \neq 0$ (後の Quiz 参照)

しかも (4.4) があるので, 異なる k に対しては, それに応ずる j も異なる. ゆえに, $\sigma \in \mathfrak{S}_m$ (m 次対称群) があって, $d_k = \pm c_{\sigma(k)}$ となる. そうすると

$$\sum \mu_k d_k = v = \sum \lambda_k c_k = \sum \lambda_{\sigma(k)} c_{\sigma(k)} = \sum \pm \lambda_{\sigma(k)} d_k.$$

よって $\pm \mu_k = \lambda_{\sigma(k)}$ となるが, $\mu_k > 0$, $\lambda_{\sigma(k)} > 0$ より, $\mu_k = \lambda_{\sigma(k)}$ である. さらに, 共に単調増加になるように番号づけてあるので, σ は恒等置換であり, 従って $d_k = c_k$ である. \square

Quiz. β_{kj} ($1 \leq k, j \leq m$) を m^2 個の数で, 次の (1),(2) をみたすとする:

(1) $\forall k$ に対して, 番号 j が存在して, $\beta_{kj} \neq 0$ となる.

(2) $k_1 \neq k_2$ ならば, 任意の j に対して $\beta_{k_1 j} \beta_{k_2 j} = 0$ である.

このとき, 各 k に対して, ただ一つ番号 j があって, $\beta_{kj} \neq 0$ となる.

証明. 結論を否定すると, (1) により

番号 k_0 と $j_1 \neq j_2$ が存在して, $\beta_{k_0 j_1} \neq 0$ かつ $\beta_{k_0 j_2} \neq 0$

となる. このとき, (2) より, 任意の $k \neq k_0$ に対して, $\beta_{k j_1} = \beta_{k j_2} = 0$. 従って (1) より, j_1, j_2 と異なる $j(k)$ が存在して, $\beta_{k j(k)} \neq 0$. $j(k)$ の可能性としては j_1, j_2 を

除く $k-2$ 通りしかないので, $k \neq k_0$ が動くとき, $j(k)$ をすべて異なるようにはとれない. ゆえに $k_1 \neq k_2$ が存在して, $j(k_1) = j(k_2)$ ($= j_0$ とおく). そうすると $\beta_{k_1 j_0} \beta_{k_2 j_0} \neq 0$ となって, (2) に反する. \square

例 4.3. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ とする. 各 $T \in V$ は線型作用素 $\mathbb{R}^q \rightarrow \mathbb{R}^p$ である. ${}^t T T$ は $\mathbb{R}^q \rightarrow \mathbb{R}^q$ は自己共役な線型変換であるから, そのスペクトル分解を

$${}^t T T = \sum_{j=1}^m \mu_j P_j$$

とする. ここで $0 < \mu_1 < \dots < \mu_m$ であり, P_j は μ_j に対応する固有空間 E_j への直交射影作用素である.

E_j の正規直交基底 $e_k^{(j)}$ ($k = 1, 2, \dots$), これらに, もし $\text{Ker}({}^t T T)$ (すなわち ${}^t T T$ の 0 固有空間) の次元が正ならば, その正規直交基底 $e_k^{(0)}$ ($k = 1, 2, \dots$) も併せて, $\{e_k^{(j)}\}_{j,k}$ を \mathbb{R}^q の正規直交基底にする. このとき

$$P_j x = \sum_k \langle x | e_k^{(j)} \rangle e_k^{(j)} \quad (\forall x \in \mathbb{R}^q)$$

となる. 各 $j = 1, 2, \dots$ と $k = 1, 2, \dots$ に対して, $f_k^{(j)} := \frac{1}{\sqrt{\mu_j}} T e_k^{(j)}$ とおくと, $j, j' \geq 1$ のとき

$$\begin{aligned} \langle f_k^{(j)} | f_{k'}^{(j')} \rangle &= \frac{1}{\sqrt{\mu_j \mu_{j'}}} \langle T e_k^{(j)} | T e_{k'}^{(j')} \rangle = \frac{1}{\sqrt{\mu_j \mu_{j'}}} \langle {}^t T T e_k^{(j)} | e_{k'}^{(j')} \rangle \\ &= \sqrt{\frac{\mu_j}{\mu_{j'}}} \langle e_k^{(j)} | e_{k'}^{(j')} \rangle = \delta_{jj'} \delta_{kk'}. \end{aligned}$$

ゆえに $\{f_k^{(j)}\}$ も正規直交系である.

主張 1. $T x = \sum_{j=1}^m \sqrt{\mu_j} \sum_k \langle x | e_k^{(j)} \rangle f_k^{(j)}$ ($\forall x \in \mathbb{R}^q$) が成り立つ.

証明. 右辺を Sx とおく. $j \geq 1$ のとき, 任意の k に対して

$$S e_k^{(j)} = \sqrt{\mu_j} f_k^{(j)} = T e_k^{(j)}.$$

そして, ${}^t T T e_k^{(0)} = 0$ より,

$$\|T e_k^{(0)}\|^2 = \langle T e_k^{(0)} | T e_k^{(0)} \rangle = \langle {}^t T T e_k^{(0)} | e_k^{(0)} \rangle = 0.$$

ゆえに $T e_k^{(0)} = 0$. 一方定義より明らかに $S e_k^{(0)} = 0$ である. 以上から $S = T$ である. \square

さて $C_j x := \sum_k \langle x | e_k^{(j)} \rangle f_k^{(j)}$ ($x \in \mathbb{R}^q$) で作用素 C_j ($j = 1, 2, \dots, m$) を定義すると, 各 C_j は明らかに部分的等長写像である. 実際, 始空間は E_j , 終空間は $\sum_k \mathbb{R} f_k^{(j)}$ である. 従って, 各 C_j は tripotent である.

主張 2. $\{C_j\}_{j=1}^m$ は tripotents の直交系である.

証明. $x \in \mathbb{R}^q, y \in \mathbb{R}^p$ のとき

$$\langle C_j x | y \rangle = \sum_k \langle x | e_k^{(j)} \rangle \langle f_k^{(j)} | y \rangle = \left\langle x \left| \sum_k \langle y | f_k^{(j)} \rangle e_k^{(j)} \right. \right\rangle$$

であるから, ${}^t C_j = \sum_k \langle \cdot | f_k^{(j)} \rangle e_k^{(j)}$. このとき, $i \neq j$ ならば

$$C_i {}^t C_j y = \sum_{k'} \langle {}^t C_j y | e_{k'}^{(i)} \rangle f_{k'}^{(i)} = \sum_{k', k} \langle y | f_k^{(j)} \rangle \langle e_k^{(j)} | e_{k'}^{(i)} \rangle f_{k'}^{(i)} = 0,$$

$${}^t C_j C_i x = \sum_k \langle C_i x | f_k^{(j)} \rangle e_k^{(j)} = \sum_{k, k'} \langle x | e_{k'}^{(i)} \rangle \langle f_{k'}^{(i)} | f_k^{(j)} \rangle e_k^{(j)} = 0$$

となり, $C_i {}^t C_j$ と ${}^t C_j C_i$ はともに零作用素である. ゆえに任意の $Z \in V$ に対して

$$(C_i \square C_j) Z = \frac{1}{2} (C_i {}^t C_j Z + Z {}^t C_j C_i) = 0.$$

主張 1 と主張 2 により, $T = \sum_j \sqrt{\mu_j} C_j$ は定理 4.2 の意味での T のスペクトル分解である.

行列論や応用数学では, $\lambda_j := \sqrt{\mu_j}$ を T の特異値 (singular value) と呼び, ここでのスペクトル分解を特異値分解と呼んでいる.

以下, $\{c_1, \dots, c_m\}$ を non-zero-tripotents の直交系とする.

補題 4.4. (1) $c := c_1 + \dots + c_m$ も tripotent である.

(2) $[c_i \square c_i, c_j \square c_j] = 0$

証明. (1) $c_i \square c_j = 0$ より

$$\begin{aligned} \{c_1 + \dots + c_m, c_1 + \dots + c_m, c_1 + \dots + c_m\} &= \{c_1, c_1, c_1\} + \dots + \{c_m, c_m, c_m\} \\ &= c_1 + \dots + c_m. \end{aligned}$$

(2) JT identity から

$$\begin{aligned} [c_i \square c_i, c_j \square c_j] &= ((c_i \square c_i) c_j) \square c_j - c_j \square ((c_i \square c_i) c_j) \\ &= ((c_j \square c_i) c_i) \square c_j - c_j \square ((c_j \square c_i) c_i) \\ &= 0 \end{aligned}$$

となつて証明終わり. □

従って, $\{c_i \square c_i\}_{i=1}^m$ は自己共役作用素の可換系であるから, V は同時固有空間に分解できる. $V_j(c_k)$ ($j = 0, \frac{1}{2}, 1$) を tripotent c_k の Peirce j 空間とする.

定理 4.5 (同時 Peirce 分解).

$$\begin{aligned} V_{00} &:= V_0(c_1) \cap \cdots \cap V_0(c_m), \\ V_{0j} &:= V_{\frac{1}{2}}(c_j) \cap \left(\bigcap_{i \neq j} V_0(c_i) \right) \quad (j = 1, 2, \dots, m), \\ V_{ij} &:= V_{\frac{1}{2}}(c_i) \cap V_{\frac{1}{2}}(c_j) \quad (1 \leq i < j \leq m), \\ V_{ii} &:= V_1(c_i) \quad (i = 1, 2, \dots, m) \end{aligned}$$

とおくと, $V = \sum_{0 \leq i \leq j \leq m} V_{ij}$ となる.

証明. まず, $c := c_1 + \cdots + c_m$ も tripotent であること, 及び

$$(c_1 \square c_1) + \cdots + (c_m \square c_m) = c \square c$$

に注意する. 共通の固有空間上での簡単な考察から tripotent c の各 Peirce 空間 $V_j(c)$ ($j = 0, \frac{1}{2}, 1$) について

$$\begin{aligned} V_0(c) &= V_0(c_1) \cap \cdots \cap V_0(c_m), \\ V_{\frac{1}{2}}(c) &= \sum_{j=1}^m \left[V_{\frac{1}{2}}(c_j) \cap \left(\bigcap_{i \neq j} V_0(c_i) \right) \right], \\ V_1(c) &= \sum_{1 \leq i < j \leq m} (V_{\frac{1}{2}}(c_i) \cap V_{\frac{1}{2}}(c_j)) + \sum_{i=1}^m V_1(c_i) \end{aligned}$$

がわかるので, 結果が従う. □

§5. JTS frames

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値な JTS とする. V の tripotents 全体を \mathcal{T} で表す:

$$\mathcal{T} := \{V \text{ の tripotents}\}.$$

$c \in \mathcal{T}$ とし, その Peirce k 空間を $V_k(c)$ ($k = 0, \frac{1}{2}, 1$) とする.

補題 5.1. $V_0(c) \square V_1(c) = V_1(c) \square V_0(c) = \{0\}$ (零作用素のみ).

証明. $(p \square q)^* = q \square p$ より, $V_1(c) \square V_0(c) = \{0\}$ を示せば十分である. $a \in V_1(c)$, $x \in V_0(c)$ とする. $k = \frac{1}{2}$ または $k = 1$ のとき, (3.1) より

$$(a \square x)(V_k(c)) \subset \{V_1(c), V_0(c), V_k(c)\} = \{0\}.$$

よって, 任意に $y \in V_0(c)$ として, $(a \square x)y = 0$ が示されれば, $a \square x = 0$ となる.

さて, 再び (3.1) より, $\{c, y, c\} \in \{V_1(c), V_0(c), V_1(c)\} = \{0\}$ であるから, JT identity より

$$(5.1) \quad 0 = \{x, a, \{c, y, c\}\} = 2\{\{x, a, c\}, y, c\} - \{c, \{a, x, y\}, c\}.$$

最右辺の第 1 項において

$$(5.2) \quad \{x, a, c\} = \{x, a, \{c, c, c\}\} = 2\{\{x, a, c\}, c, c\} - \{c, \{a, x, c\}, c\}.$$

ここで $\{x, a, c\} \in \{V_0(c), V_1(x), V_1(c)\} \subset V_0(c)$ より

$$\{\{x, a, c\}, c, c\} = (c \square c)(\{x, a, c\}) = 0.$$

そして

$$\{a, x, c\} \in \{V_1(c), V_0(c), V_1(c)\} \subset \{0\}.$$

よって (5.2) の右辺 = 0 が出るので, $\{x, a, c\} = 0$ である. 従って (5.1) より

$$P(c)(\{a, x, y\}) = \{c, \{a, x, y\}, c\} = 0.$$

$\{a, x, y\} \in \{V_1(c), V_0(c), V_0(c)\} \subset V_1(c)$ と系 3.3 (2) より, $\{a, x, y\} = 0$ が出る. \square

定義. $c, d \in \mathcal{T}$ とする.

$$c < d \stackrel{\text{def}}{\iff} 0 \neq d - c \in \mathcal{T} \text{ かつ } c \square (d - c) = 0.$$

言い換えると, $c < d$ とは, $0 \neq \exists c' \in \mathcal{T}$ with $c \square c' = 0$ s.t. $d = c + c'$ となること.

補題 5.2. \mathcal{T} における \leq は partial order である.

証明. 以下 $c, d, e \in \mathcal{T}$ とする.

(1) $c \leq c$ は明らか.

(2) $c \leq d$ かつ $d \leq c$ とする. このとき, $d = c + (d - c)$, $c = d + (c - d)$ において,

$$(d - c) \square c = 0, \quad (c - d) \square d = 0.$$

従って

$$d - c = \{d - c, d - c, d - c\} = \{d - c, d, d - c\} = 0.$$

ゆえに $d = c$ である.

(3) $c \leq d$ かつ $d \leq e$ とする. このとき, $d = c + (d - c)$, $e = d + (e - d)$ において

$$(d - c) \square c = 0, \quad (e - d) \square d = 0.$$

さて, $e = c + (e - c) = c + \{(e - d) + (d - c)\}$ において

$$\{d, d, d - c\} = \{d, d - c, d - c\} = \{d - c, d - c, d - c\} = d - c,$$

$$\{d, d, e - d\} = 0.$$

ゆえに $d - c \in V_1(d)$, $e - d \in V_0(d)$. 補題 5.1 より, $(d - c) \square (e - d) = 0$. よって $e - c = (e - d) + (d - c) \in \mathcal{T}$. そして

$$(e - c) \square c = (e - d) \square c + (d - c) \square c = -(e - d) \square (d - c) = 0.$$

ゆえに $c \leq e$ である. □

以下 \mathcal{T} でこの順序に関する maximal や minimal なものを考える.

補題 5.3. $c \in \mathcal{T}$ とする. このとき

$$c \text{ が maximal} \iff V_0(c) = \{0\}.$$

証明. $[\implies]$ $c \in \mathcal{T}$ が maximal かつ $V_0(c) \neq \{0\}$ とする. 元 $0 \neq x \in V_0(c)$ のスペクトル分解を V で行って, $x = \sum_{j=1}^m \lambda_j c_j$ とする. ただし, $0 < \lambda_1 < \dots < \lambda_m$. $x \neq 0$ であるので, ある番号 j に対して, $c_j \neq 0$ である. さらに, $c_j \in \mathbb{R}[x]$ であり, (3.1) より $\mathbb{R}[x] \subset V_0(c)$ となるから, $c_j \in V_0(c)$ である. これは c_j が $V_0(c)$ の non-zero tripotent であることを示している. 補題 5.1 より $c_j \square c = 0$ であるから, $c + c_j \in \mathcal{T}$ となって, c の極大性に反する.

$[\impliedby]$ $c \in \mathcal{T}$ が maximal でなかったら, $0 \neq d \in \mathcal{T}$ が存在して, $c \square d = 0$ かつ $c + d \in \mathcal{T}$ となる. このとき, $(c \square c)d = \{d, c, c\} = 0$ より, $d \in V_0(c)$ である. □

定義. Minimal な non-zero tripotent を **primitive** であるという.

従って, $0 \neq c \in \mathcal{T}$ が primitive であるとは, non-zero で直交する tripotents c_1, c_2 を用いて, $c = c_1 + c_2$ と分解できないことである.

補題 5.4. 0 でない任意の $c \in \mathcal{T}$ は互いに直交する primitive tripotents の和で表される.

証明. $0 \neq c \in \mathcal{T}$ が primitive でないとする. 互いに直交する non-zero tripotents への分解の中で, 最も長いものを $c = c_1 + \cdots + c_n$ とする. このとき, 各 c_i は primitive であることを示そう.

結論を否定する. 必要なら番号を付け替えて, c_1 が primitive でないとする:

$$c_1 = c'_1 + c''_1, \quad c'_1 \square c''_1 = 0, \quad c'_1, c''_1 \in \mathcal{T} \setminus \{0\}.$$

このとき

$$(c_1 \square c_1)c'_1 = \{c_1, c'_1, c'_1\} = \{c'_1, c'_1, c'_1\} = c'_1.$$

ゆえに $c'_1 \in V_1(c)$. 同様に $c''_1 \in V_1(c_1)$. 一方で, $j \neq 1$ のとき, $c_j \in V_0(c_1)$. 補題 5.1 より $c'_1 \square c_j = c''_1 \square c_j = 0$. このとき

$$c = c'_1 + c''_1 + c_2 + \cdots + c_n$$

は互いに直交する non-zero tripotents の和となって, n の定義に反する. \square

定義. **JTS frame** とは, primitive idempotents の極大な直交系のこと.

(c_1, \dots, c_r) が JTS frame ならば, 補題 5.1 より, $c := c_1 + \cdots + c_r$ は maximal tripotent である.

各 $c \in \mathcal{T}$ に対して

$$A(c) := \{x \in V_1(c) ; P(c)x = x\}$$

とおく. $A(c)$ は Euclid 型の Jordan 代数になる (次節 (以降) 参照).

命題 5.5. $c \in \mathcal{T}$ が primitive $\iff A(c) = \mathbb{R}c$.

例 5.6. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ で考える. 簡単のため $p < q$ とする. 各 $i = 1, \dots, p$ に対して $c_i := E_{ii} \in V$ ((i, i) 行列単位) とおき, $c := c_1 + \cdots + c_p$ とする:

$$c = \left(\begin{array}{ccc|ccc} 1 & & & 0 & \cdots & 0 \\ & 1 & & 0 & \cdots & 0 \\ & & \ddots & \vdots & & \vdots \\ & & & 1 & \cdots & 0 \end{array} \right)$$

$V_0(c) = \{0\}$ より, c は maximal tripotent である. また例 3.4 より

$$A(c_1 + \cdots + c_k) = \left(\begin{array}{c|c} \text{Sym}(k, \mathbb{R}) & 0 \\ \hline 0 & 0 \end{array} \right)$$

であり, 特に $A(c_j) = \mathbb{R}c_j$ より, 各 c_j は primitive である. ゆえに (c_1, \dots, c_p) は JTS frame である. この JTS frame に関する V の同時 Peirce 分解は

$$\begin{aligned} V_{0j} &:= \mathbb{R}E_{j,p+1} \oplus \cdots \oplus \mathbb{R}E_{j,q} & (j = 1, \dots, p) \\ V_{ij} &:= \mathbb{R}E_{ij} \oplus \mathbb{R}E_{ji} & (1 \leq i < j \leq p) \\ V_{ii} &:= \mathbb{R}c_i & (i = 1, \dots, p) \end{aligned}$$

とおくとき, $V = \sum_{\substack{0 \leq i \leq j \leq p \\ (i,j) \neq (0,0)}} V_{ij}$ である.

定義. V の JTS 自己同型の全体のなす群を $\text{Aut}(V)$ で表す. すなわち

$$(5.3) \quad \text{Aut}(V) := \{g \in GL(V) ; g\{x, y, z\} = \{gx, gy, gz\} \text{ (for } \forall x, y, z \in V)\}.$$

補題 5.7. $\text{Aut}(V)$ は V の直交群の閉部分群. 従ってコンパクトである.

証明. $g \in \text{Aut}(V)$ とする. (5.3) で, z のところを $g^{-1}z$ と置き換えることにより, $g(x \square y)g^{-1} = gx \square gy$ を得る. 両辺の trace をとると, $\langle x | y \rangle = \langle gx | gy \rangle$ を得る. ゆえに $g \in O(V)$ (V の直交群). 閉部分群であることは明らか. \square

例 5.8. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ とする. 各 $k_1 \in O(p)$, $k_2 \in O(q)$ に対して

$$T_{k_1, k_2} v := k_1 v k_2^{-1} \quad (v \in V)$$

とおくと, $T_{k_1, k_2} \in \text{Aut}(V)$ であって, $O(p) \times O(q) \ni (k_1, k_2) \mapsto T_{k_1, k_2} \in \text{Aut}(V)$ は群準同型である.

$K := (\text{Aut}(V))^\circ$ ($\text{Aut}(V)$ の単位元の連結成分) とおく. 任意の 2 個の maximal tripotents c, d に対して, $k \in K$ が存在して, $d = kc$ となることがわかっている.

• JTS frame を構成する primitive tripotents の個数は, frame によらず一定であることが示される. この個数を JTS の階数と呼ぶ.

定義. $c \in \mathcal{T}$ とする. c の階数とは $V_1(c)$ の階数のこと (注意: c は $V_1(c)$ の maximal tripotent である.)

- primitive tripotent の階数は 1 である.
- maximal tripotent の階数は V の階数に等しい (定義!).

§6. Jordan 代数と JTS

A を \mathbb{K} 上の有限次元ベクトル空間とする ($\mathbb{K} = \mathbb{R}$ or \mathbb{C}). A に双線型な積 $x, y \mapsto xy$ (結合法則は仮定しない) 次の 2 条件がみたされるとき, A は **Jordan 代数**であるという: 任意の $x, y \in A$ に対して

$$(JA1) \quad xy = yx,$$

$$(JA2) \quad x^2(xy) = x(x^2y).$$

A で $x \in A$ をかけるという乗法作用素を $L(x)$ で表す: $L(x)y := xy$ ($y \in A$). このとき, (JA2) が任意の $y \in A$ に成立することと, 次の作用素の等式が同値であることがわかる:

$$(6.1) \quad [L(x^2), L(x)] = 0.$$

例 6.1. A を結合法則が成り立つ代数とする. たとえば $A = \text{Mat}(n, \mathbb{K})$ ($\mathbb{K} = \mathbb{R}$ or \mathbb{C}). A に新たな積 \circ を

$$x \circ y := \frac{1}{2}(xy + yx)$$

で定義すると, この積で A は Jordan 代数になる. 実際, 任意の $x, y \in A$ で (JA1) が成り立つことは明らかである. また平方はどちらの積でも同じなので, 単に x^2 と書くことにして, 簡単な計算により

$$x^2 \circ (x \circ y) = \frac{1}{4}(x^3y + x^2yx + xyx^2 + yx^3) = x \circ (x^2 \circ y).$$

例 6.2. A は結合法則が成り立つ代数とし, その部分空間 V は平方安定とする. すなわち, 「 $x \in V \implies x^2 \in V$ 」が成り立つとする. このとき, V に新たに積 \circ を定義すると, V は Jordan 代数になる:

$$x \circ y := \frac{1}{2}((x+y)^2 - x^2 - y^2) \quad (x, y \in V).$$

実際これの右辺は $\frac{1}{2}(xy + yx)$ に等しい.

(i) $A = \text{Mat}(n, \mathbb{K})$ ($\mathbb{K} = \mathbb{C}, \mathbb{R}$) において, $V = \text{Sym}(n, \mathbb{K})$ は平方安定. 従って, V は Jordan 代数になる.

(ii) $A = \text{Mat}(n, \mathbb{C})$ の 実 部分ベクトル空間 $V = \text{Herm}(n, \mathbb{C})$ (エルミート行列全体) は平方安定. 従って, V は 実 Jordan 代数になる.

以下 A は Jordan 代数とする.

補題 6.3. $x, y, z \in A$ とする.

$$(1) [L(xy), L(z)] + [L(yz), L(x)] + [L(zx), L(y)] = 0.$$

- (2) $L((xy)z) = L(yz)L(x) + L(zx)L(y) + L(xy)L(z) - L(x)L(z)L(y) - L(y)L(z)L(x).$
 (3) $[[L(x), L(z)], L(y)] = L(x(yz) - (xy)z).$

証明. (1) $\xi, \eta, \zeta \in \mathbb{R}$ とする. (6.1) より

$$L((\xi x + \eta y + \zeta z)^2)L(\xi x + \eta y + \zeta z) = L(\xi x + \eta y + \zeta z)L((\xi x + \eta y + \zeta z)^2).$$

$u \mapsto L(u)$ が線型であることに注意して, この両辺を, 作用素を係数とする ξ, η, ζ の多項式に展開する. 両辺の $\xi\eta\zeta$ の係数を比較すると

$$(6.2) \quad L(xy)L(z) + L(yz)L(x) + L(zx)L(y) = L(x)L(yz) + L(y)L(zx) + L(z)L(xy).$$

これより (1) の等式を得る.

(2) 作用素の等式 (6.2) を $a \in A$ に作用させて

$$(xy)(za) + (yz)(xa) + (zx)(ya) = x((yz)a) + y((zx)a) + z((xy)a).$$

積は可換であることに注意して, これを任意の $z \in A$ に作用する作用素の等式と解釈すると

$$L(xy)L(a) + L(ax)L(y) + L(ya)L(x) = L(x)L(a)L(y) + L(y)L(a)L(x) + L((xy)a).$$

a を z と書き換えれば (2) を得る.

(3) (2) の等式で x, z を入れ替えて, その結果から (2) の等式を引くと

$$\begin{aligned} L(x(yz) - (xy)z) &= -L(z)L(x)L(y) - L(y)L(x)L(z) + L(x)L(z)L(y) + L(y)L(z)L(x) \\ &= [L(x), L(z)]L(y) + L(y)[L(z), L(x)] \\ &= [[L(x), L(z)], L(y)] \end{aligned}$$

となって (3) の等式を得る. □

A 上の線型作用素の全体を $L(A)$ で表し

$$\text{Der}(A) := \{D \in L(A) ; D(xy) = (Dx)y + x(Dy) \quad (\forall x, y \in A)\}$$

とおく. $\text{Der}(A)$ の元は A の **derivation** と呼ばれる. 次は定義より容易にわかる:
 $D \in L(A)$ のとき,

$$(6.3) \quad D \in \text{Der}(A) \iff L(Dx) = [D, L(x)] \quad (\forall x \in A).$$

補題 6.4. $x, y \in A$ のとき, $[L(x), L(y)] \in \text{Der}(A).$

証明. $D = [L(x), L(y)]$ とおく. このとき任意の $a \in A$ に対して

$$\begin{aligned} [D, L(a)] &= [[L(x), L(y)], L(a)] = L(x(ay) - (xa)y) \quad (\text{補題 6.3 (3)}) \\ &= L(x(ya) - y(xa)) = L([L(x), L(y)]a) = L(Da) \end{aligned}$$

となつて, (6.3) より, $D \in \text{Der}(A)$ である. □

次に A に 3 項積を導入しよう:

$$(6.4) \quad \{x, y, z\} := (xy)z + x(yz) - y(xz).$$

(6.4) の右辺は

$$(L(xy) + [L(x), L(y)])z$$

と書けることに注意.

命題 6.5. A は 3 項積 (6.4) で JTS になる.

証明. まず, Jordan 積の可換性から $\{x, y, z\} = \{z, y, x\}$ は明らか. JT identity を示そう. $a, b \in A$ とし, $D_{a,b} := [L(a), L(b)]$ とおく. 補題 6.4 より $D_{a,b} \in \text{Der}(A)$ である. 従つて, 3 項積の定義 (6.4) より, 任意の $x, y, z \in A$ に対して

$$(6.5) \quad D_{a,b}(\{x, y, z\}) = \{D_{a,b}x, y, z\} + \{x, D_{a,b}y, z\} + \{x, y, D_{a,b}z\}$$

がわかる. 次を示そう:

$$(6.6) \quad L(a)\{x, y, z\} = \{L(a)x, y, z\} - \{x, L(a)y, z\} + \{x, y, L(a)z\}.$$

まず, (6.6) の右辺は, 次の作用素を z に作用させたものであることに注意する:

$$(6.7) \quad \begin{aligned} &L((ax)y) + [L(ax), L(y)] - L(x(ay)) \\ &\quad - [L(x), L(ay)] + L(xy)L(a) + [L(x), L(y)]L(a). \end{aligned}$$

また (6.6) の左辺は, 次の作用素を z に作用させたものである:

$$(6.8) \quad L(a)L(xy) + L(a)[L(x), L(y)].$$

等式 (6.8) から等式 (6.7) を引くと

$$(6.9) \quad \begin{aligned} &L(x(ay) - (ax)y) + [L(a), L(x), L(y)] \\ &\quad - [L(xy), L(a)] - [L(ya), L(x)] - [L(ax), L(y)]. \end{aligned}$$

補題 6.3 (3) より, (6.9) の 1 行目は 0 であり, 同じ補題 (1) より, (6.9) の 2 行目も 0 である. ゆえに (6.6) が証明された.

$D_{b,a} = -D_{a,b}$ であることに注意すれば, (6.5) と (6.6) より

$$\begin{aligned} \{a, b, \{x, y, z\}\} &= L(ab)(\{x, y, z\}) + D_{a,b}(\{x, y, z\}) \\ &= \{\{a, b, x\}, y, z\} - \{x, \{b, a, y\}, z\} + \{x, y, \{a, b, z\}\} \end{aligned}$$

が示されたことになる. □

注意 6.6. A が単位元 e を持つとき, 元の Jordan 積は

$$xy = \{x, e, y\} (= \{x, y, e\} = \{e, x, y\})$$

で復元される.

命題 6.7. $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を JTS とし, $a \in V$ を固定する.

$$x \cdot_a y := \{x, a, y\}$$

で V に積を定義すると, この積で V は Jordan 代数になる.

証明. まず $x \cdot_a y = y \cdot_a x$ は明らか. $L_a(x)y := x \cdot_a y$ ($x, y \in V$) とおく. 明らかに $L_a(x) = x \square a$ である. 証明すべきは, $[L_a(x), L_a(x \cdot_a x)] = 0$ である. そのためには

$$P_a(x) := 2L_a(x)^2 - L_a(x \cdot_a x)$$

とにおいて, $[L_a(x), P_a(x)] = 0$ を示せばよい. さて定義より

$$P_a(x) = 2(x \square a)^2 - (P(x)a) \square a = P(x)P(a) \quad (\text{命題 2.2 (2)}) .$$

ゆえに

$$[L_a(x), P_a(x)] = [x \square a, P(x)P(a)] = P(x)P(a)(x \square a) - (x \square a)P(x)P(a)$$

であるが, 最右辺において, 命題 2.2 (1) を 2 回使うことにより

$$P(x)P(a)(x \square a) = P(x)(a \square x)P(a) = (x \square a)P(x)P(a)$$

がわかるので, $[L_a(x), P_a(x)] = 0$ である. □

定義. Jordan 代数 A が **Euclid 型** であるとは, A に内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ が存在して, $\langle xy | z \rangle = \langle x | yz \rangle$ が任意の $x, y, z \in A$ に対して成り立つときをいう. このような内積を結合的な内積という.

注意 6.8. Jordan 積の可換性から, $\langle x|y \rangle$ が結合的な内積ならば

$$\langle L(y)x|z \rangle = \langle xy|z \rangle = \langle x|yz \rangle = \langle x|L(y)z \rangle \quad (*)$$

となるから, 乗法作用素 $L(y)$ は結合的な内積に関して, 自己共役である. 逆に, 乗法作用素がつねに自己共役となる内積があれば, その内積は結合的である ((*)) で両端が等しいので, 真ん中の等号が導かれる).

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値 JTS とし, $c \in V$ を non-zero tripotent とする. $V = V_0(c) \oplus V_{\frac{1}{2}}(c) \oplus V_1(c)$ を c についての V の Peirce 分解とする.

命題 6.9. (1) $V_1(c)$ は $x \cdot_c y := \{x, c, y\}$ による積で単位元 c を持つ Jordan 代数になっている.

(2) $A(c) := \{x \in V_1(c); P(c)x = x\}$ は $V_1(c)$ の Jordan 部分代数で, Euclid 型になっている.

証明. (1) 乗積ルール (3.1) より, 積 \cdot_c に関して $V_1(c)$ は閉じている. また $x \in V_1(c)$ のとき, $x \cdot_c c = \{x, c, c\} = x$ であるから, c は単位元である.

(2) を示すために次の補題を用意する.

補題 6.10. $P(c)$ を $V_1(c)$ に制限すると, $P(c)$ は Jordan 代数としての involutive な自己同型になっている.

証明. $x \in V_1(c)$ とする.

$$\begin{aligned} P(c)(x \cdot_c x) &= P(c)(\{x, c, x\}) = P(c)P(x)c \\ &= P(c)P(x)P(c)c \stackrel{(*)}{=} P(P(c)x)c \\ &= \{P(c)x, c, P(c)x\} = (P(c)x) \cdot_c (P(c)x). \end{aligned}$$

ただし (*) で補遺に述べる等式 (命題 6.12) を使った. ゆえに $P(c)(x \cdot_c x) = (P(c)x) \cdot_c (P(c)x)$ が成り立つが, polarize して (さらに元 $y \in V_1(c)$ をとって, 今得られた等式で x の代わりに $x + y$ とおいて展開して整理すると),

$$P(c)(x \cdot_c y) = (P(c)x) \cdot_c (P(c)y)$$

を得る. $P(c)$ が $V_1(c)$ 上 involutive であることは既知 (系 3.3). □

この補題を踏まえて, $x \in V_1(c)$ に対して, $x^* := P(c)x$ とおく (例 3.4 も参照). これにより, Jordan 代数としての自己同型で involutive なものの固定点集合である $A(c)$ は $V_1(c)$ の Jordan 部分代数になっている. 最後に, もともと V に入っている

内積 $\langle x|y \rangle = \text{tr}(x \square y)$ を $A(c)$ に制限することで、結合的な内積を得ることを示そう。そのために次の補題を用意する。

補題 6.11. $x \in V_1(c)$ のとき, $x \square c = c \square x^*$.

証明. 任意に $y \in V$ をとって, $\{x, c, y\} = \{c, x^*, y\}$ を示そう。

(i) $y \in V_0(c)$ のとき. 補題 5.1 より, $V_0(c) \square V_1(c) = 0$ であるから,

$$\{x, c, y\} = 0 = \{c, x^*, y\}.$$

(ii) $y \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ のとき

$$\begin{aligned} \{x, c, y\} &= \{\{c, x^*, c\}, c, y\} \\ &= 2\{c, x^*, \{y, c, c\}\} - \{c, \{c, y, x^*\}, c\} \\ &= \{c, x^*, y\} \quad (\because \{c, y, x^*\} \in \{V_1(c), V_{\frac{1}{2}}(c), V_1(c)\} = \{0\}). \end{aligned}$$

(iii) 最後に $y \in V_1(c)$ とする. このとき

$$\begin{aligned} \{c, x^*, y\} &= \{c, \{c, x, c\}, y\} \\ &= -\{x, c, \{c, c, y\}\} + \{\{x, c, c\}, c, y\} + \{c, c, \{x, c, y\}\} \\ &= -\{x, c, y\} + \{x, c, y\} + \{x, c, y\} \\ &= \{x, c, y\} \end{aligned}$$

となって証明終わり. □

命題 6.9 (2) の証明. $x \in A(c)$ のとき, $x^* = x$ および $L_c(x) = x \square c$ と補題 6.11 より

$$L_c(x)^* = (x \square c)^* = c \square x = c \square x^* = x \square c = L_c(x).$$

ゆえに Jordan 代数 $A(c)$ は Euclid 型である. □

§6 の補遺

命題 6.12. 一般の JTS $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ において, 次の公式 (基本公式と呼ばれる) が成立する: 任意の $x, y \in V$ に対して

$$P(P(x)y) = P(x)P(y)P(x).$$

証明. $x, y, z \in V$ とする. 定義と JTS identity より

$$\begin{aligned} P(P(x)y)z &= \{P(x)y, z, P(x)y\} = \{P(x)y, z, \{x, y, x\}\} \\ &= \{\{P(x)y, z, x\}, y, x\} - \{x, \{z, P(x)y, y\}, x\} + \{x, y, \{P(x)y, z, x\}\} \\ &= 2\{x, y, \{P(x)y, z, x\}\} - P(x)(\{y, P(x)y, z\}). \end{aligned}$$

ここで命題 2.2 (1) を 2 回使って

$$\begin{aligned} \{x, y, \{P(x)y, z, x\}\} &= \{x, y, P(P(x)y, x)z\} = \{x, y, P(x)(\{y, x, z\})\} \\ &= P(P(x)u, x)y \quad (u := \{y, x, z\}) \\ &= P(x)(u \square x)y = P(x)(\{y, x, \{y, x, z\}\}). \end{aligned}$$

ゆえに

$$\begin{aligned} P(P(x)y)z &= 2P(x)(\{y, x, \{y, x, z\}\}) - P(x)(\{y, P(x)y, z\}) \\ &= P(x)\{2(y \square x)^2 - y \square (P(x)y)\}z \\ &= P(x)P(y)P(x) \quad (\text{命題 2.2 (2)}). \end{aligned}$$

よって証明終わり. □

§7. JTS と Jordan 代数の表現

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値実 JTS とする. 内積は $\langle v_1 | v_2 \rangle := \text{tr}(v_1 \square v_2)$ で与える. また $P(x)y = \{x, y, x\}$ を思い出しておく.

極大な tripotent $c \in V$ を一つとって固定し, その Peirce 分解を $V = V_1(c) \oplus V_{\frac{1}{2}}(c)$ とする (補題 5.3 より $V_0(c) = \{0\}$ に注意). 命題 6.9 より, $V_1(c)$ は積

$$a \cdot_c b := \{a, c, b\}$$

により, c を単位元とする Jordan 代数になっている. さらに $a \in V_1(c)$ に対して, $a^* := P(c)a$ とおくと, $a \mapsto a^*$ は Jordan 代数としての自己同型写像であり, $a^{**} = a$ である (補題 6.10). その固定点集合を $A(c)$ とする:

$$A(c) := \{a \in V_1(c) ; a^* = a\}.$$

$A(c)$ は c を単位元とする Euclid 型の Jordan 代数である (命題 6.9).

各 $a \in V_1(c)$ に対して, $V_{\frac{1}{2}}(c)$ 上の作用素 $\varphi(a)$ を

$$(7.1) \quad \varphi(a)x := 2\{a, c, x\} \quad (x \in V_{\frac{1}{2}}(c))$$

で定義する. 乗積ルール (3.1) より

$$\{V_1(c), V_1(c), V_{\frac{1}{2}}(c)\} \subset V_{\frac{1}{2}}(c)$$

であるから, 確かに $\varphi(a) \in \text{End}(V_{\frac{1}{2}}(c))$ を定義している. さらに, $\varphi(c)x = 2\{c, c, x\} = x$ より, $\varphi(c) = I$ である. また, 補題 6.11 より

$$(7.2) \quad \varphi(a)x = 2\{c, a^*, x\} \quad (a \in V_1(c), x \in V_{\frac{1}{2}}(c))$$

となることにも注意しておこう.

命題 7.1. 写像 $a \mapsto \varphi(a) \in \text{End}(V_{\frac{1}{2}}(c))$ は Jordan 代数 $V_1(c)$ の $*$ 表現になっている: すなわち, $a, b \in V_1(c)$ のとき

$$\begin{cases} \varphi(a \cdot_c b) = \frac{1}{2}(\varphi(a)\varphi(b) + \varphi(b)\varphi(a)) \\ \varphi(a)^* = \varphi(a^*) \quad (\text{左辺の } * \text{ は内積 } \langle \cdot | \cdot \rangle \text{ に関する作用素の共役}) \end{cases}$$

この証明のために次の補題を用意する ((7.1) を一般化する式になっている):

補題 7.2. $a, b \in V_1(c)$ かつ $x \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ のとき

$$\{a, b^*, x\} = \frac{1}{2}\varphi(a)\varphi(b)x.$$

証明. $a = P(c)a^* = \{c, a^*, c\}$ であるから

$$\begin{aligned} \{a, b^*, x\} &= \{x, b^*, \{c, a^*, c\}\} \\ &= 2\{\{x, b^*, c\}, a^*, c\} - \{c, \{b^*, x, a^*\}, c\}. \end{aligned}$$

ここで乗積ルール (3.1) より $\{b^*, x, a^*\} \in \{V_1(c), V_{\frac{1}{2}}(c), V_1(c)\} = \{0\}$ であるから, (7.2) より

$$\{a, b^*, x\} = 2\{\{x, b^*, c\}, a^*, c\} = \frac{1}{2}\varphi(a)\varphi(b)x$$

となって証明終わり. □

命題 7.1 の証明. まず表現であること. 定義より

$$\begin{aligned} \varphi(a)\varphi(b)x &= 4\{a, c, \{b, c, x\}\} \\ &= 4\{\{a, c, b\}, c, x\} - 4\{b, \{c, a, c\}, x\} + 4\{b, c, \{a, c, x\}\} \\ &= 2\varphi(a \cdot_c b)x - 4\{b, a^*, x\} + \varphi(b)\varphi(a)x \\ &= 2\varphi(a \cdot_c b)x - \varphi(b)\varphi(a)x. \end{aligned}$$

一番最後の等号は補題 7.2 による. 次に $x, y \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ のとき

$$\begin{aligned} \langle \varphi(a)x | y \rangle &= 2\langle (a \square c)x | y \rangle = 2\langle x | (c \square a)y \rangle \\ &= 2\langle x | (a^* \square c)y \rangle \quad (\text{補題 6.11}) \\ &= \langle x | \varphi(a^*)y \rangle. \end{aligned}$$

これは $\varphi(a)^* = \varphi(a^*)$ であることを示している. □

さて $A(c)$ は結合的内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ を持つ Euclid 型の Jordan 代数であるから

$$\Omega := \text{Int}\{a \cdot_c a ; a \in A(c)\} \quad (2 \text{ 乗で表される元全体の内部})$$

とおくと, Ω は内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ に関して自己双対な開凸錐になっている:

- (0) $A(c)$ の開集合である.
- (1) 凸集合である; $a, b \in \Omega \implies \alpha a + (1 - \alpha)b \in \Omega$ for $\forall \alpha \in [0, 1]$.
- (2) 錐である; $a \in \Omega \implies \lambda a \in \Omega$ for $\forall \lambda > 0$.
- (3) 内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ に関して自己双対である;

$$\Omega^* := \{b \in A(c) ; \langle b | a \rangle > 0 \ (\forall a \in \bar{\Omega} \setminus \{0\})\}$$

(内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ に関する Ω の双対錐という)

とおくとき, $\Omega^* = \Omega$ となる.

事実. (1) Ω は $A(c)$ の可逆元全体の集合の中で, 単位元を含む連結成分に等しい.

(2) Ω の閉包 $\bar{\Omega}$ について次が成立する:

$$(7.3) \quad \bar{\Omega} = \{a \cdot_c a ; a \in A(c)\} = \{a \in V_1(c) ; \langle a | b \rangle \geq 0 \ (\forall b \in \bar{\Omega})\}$$

命題 7.3. $a \in \Omega$ ならば, $\varphi(a)$ は自己共役で正定値である.

証明. $a \in A(c)$ ならば $a^* = a$ より, 命題 7.1 より $\varphi(a)$ は自己共役である. $a \in \bar{\Omega}$ とすると, (7.3) より, 適当な $b \in A(c)$ を用いて $a = b \cdot_c b$ と書ける. このとき, 命題 7.1 より

$$\varphi(a) = \varphi(b \cdot_c b) = \varphi(b)^2$$

となって, $\varphi(a)$ は半正定値である. さらに $a \in \Omega$ とすると, a は $A(c)$ の可逆元なので, b も可逆元である. ゆえに $\varphi(b)$ も可逆となるから, $\varphi(a)$ は正定値である. □

$x, y \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ を固定するとき, $A(c) \ni a \mapsto \langle \varphi(a)x | y \rangle \in \mathbb{R}$ は $A(c)$ 上の線型形式であるから, 一意的に $Q(y, x) \in A(c)$ が存在して,

$$\langle \varphi(a)x | y \rangle = \langle a | Q(y, x) \rangle \quad (\forall a \in A(c))$$

となる. 明らかに $y, x \mapsto Q(y, x) \in A(c)$ は双線型である. 次の補題では, 乗積ルール (3.1) より, $\{y, x, c\} \in \{V_{\frac{1}{2}}(c), V_{\frac{1}{2}}(c), V_1(c)\} \subset V_1(c)$ に注意.

命題 7.4. $x, y \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ とする.

(1) $Q(y, x) = \{y, x, c\} + \{x, y, c\}$.

(2) $Q(x, y) = Q(y, x)$.

(3) $Q(x, x) \in \bar{\Omega}$ であり, 「 $Q(x, x) = 0 \iff x = 0$ 」である.

証明. まず, $x, y \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ のとき, $\{x, y, c\}^* = \{y, x, c\}$ を示そう. 定義より

$$\begin{aligned} \{x, y, c\}^* &= P(c)\{x, y, c\} = \{c, \{x, y, c\}, c\} \\ &= -\{y, x, \{c, c, c\}\} + 2\{\{y, x, c\}, c, c\} \\ &= \{y, x, c\}. \end{aligned}$$

(1) $a \in A(c)$ かつ $x, y \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ とするとき

$$\begin{aligned} \langle \varphi(a)x | y \rangle &= 2\langle (a \square c)x | y \rangle = 2\langle (x \square c)a | y \rangle \\ &= 2\langle a | (c \square x)y \rangle = 2\langle a | \{y, x, c\} \rangle. \end{aligned}$$

$\varphi(a)^* = \varphi(a)$ であるから, 上の式において, $\langle \varphi(a)x | y \rangle = \langle x | \varphi(a)y \rangle = \langle \varphi(a)y | x \rangle$ となるので,

$$\langle \varphi(a)x | y \rangle = \frac{1}{2}(\langle \varphi(a)x | y \rangle + \langle \varphi(a)y | x \rangle) = \langle a | \{y, x, c\} \rangle + \langle a | \{x, y, c\} \rangle.$$

証明の冒頭で示したことから,

$$\{y, x, c\} + \{x, y, c\} = \{y, x, c\} + \{y, x, c\}^* \in A(c)$$

であるから, $Q(y, x) = \{y, x, c\} + \{x, y, c\}$.

(2) (1) より明らか.

(3) $b \in \bar{\Omega}$ とすると, 定義と命題 7.3 より

$$\langle Q(x, x) | b \rangle = \langle \varphi(b)x | x \rangle \geq 0.$$

(7.3) より, $Q(x, x) \in \bar{\Omega}$ となる. さらにもし $Q(x, x) = 0$ ならば, 上で $b = c$ ($A(c)$ の単位元) とおくと, $\varphi(c) = I$ より

$$0 = \langle Q(x, x) | c \rangle = \|x\|^2.$$

これより $x = 0$ が出る.

例 7.5. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ ($p < q$) のとき. 3項積は $\{x, y, z\} = \frac{1}{2}(x^t y z + z^t y x)$. 極大 tripotent として, $c := (I_p | O) \in V$ をとって固定する. 対応する V の Peirce 分解は

$$V_1(c) = (\text{Mat}(p \times p, \mathbb{R}) | O), \quad V_{\frac{1}{2}}(c) = (O | \text{Mat}(p \times (q - p), \mathbb{R})).$$

例 3.4 より, $a \in \text{Mat}(p \times p, \mathbb{R})$ のとき

$$(a | O)^* = ({}^t a | O)$$

であるから

$$A(c) = (\text{Sym}(p \times p, \mathbb{R}) | O).$$

$a, b \in \text{Mat}(p \times p)$ のとき

$$(a | O)^t (I_p | O) (b | O) = (a | O) \left(\frac{I_p}{O} \right) (b | O) = a (b | O) = (ab | O)$$

であるから, $V_1(c) \equiv \text{Mat}(p \times p, \mathbb{R})$ に入る Jordan 代数構造は例 6.1 におけるものと同じである. 従ってまた, $A(c) \equiv \text{Sym}(p, \mathbb{R})$ に入る Jordan 代数構造は例 6.2 におけるものと同じ. ゆえに, $\Omega = \text{Sym}(p, \mathbb{R})^{++}$ ($++$ は正定値なものを表す) となる.

$a \in \text{Mat}(p \times p, \mathbb{R})$, $x \in \text{Mat}(p \times (q - p))$ とするとき

$$\begin{aligned} & (a | O)^t (I_p | O) (O | x) + (O | x)^t (I_p | O) (a | O) \\ &= (a | O) \left(\frac{I_p}{O} \right) (O | x) + (O | x) \left(\frac{I_p}{O} \right) (a | O) \\ &= (O | ax). \end{aligned}$$

すなわち, Jordan 代数 $A(c)$ の表現 φ は, $a \in \text{Sym}(p, \mathbb{R})$ を左から $\text{Mat}(p \times (q - p), \mathbb{R})$ の行列に掛けるという作用と同じになる.

最後に $x, y \in \text{Mat}(p \times (q-p), \mathbb{R})$ のとき

$$\begin{aligned} & (O \mid y)^t (O \mid x) (I_p \mid O) + (I_p \mid O)^t (O \mid x) (O \mid y) \\ &= (O \mid y) \begin{pmatrix} O \\ {}^t x \end{pmatrix} (I_p \mid O) + (I_p \mid O) \begin{pmatrix} O \\ {}^t x \end{pmatrix} (O \mid y) \\ &= (y {}^t x \mid O) \end{aligned}$$

であるから,

$$Q(y, x) = \left(\frac{1}{2}(y {}^t x + x {}^t y) \mid O \right).$$

従って,

$$Q(x, x) = (x {}^t x \mid O).$$

$x = \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ \vdots \\ \mathbf{x}_p \end{pmatrix}$ (各 \mathbf{x}_j は横ベクトル $\in \mathbb{R}^{q-p}$) と表すと

$$x {}^t x = \begin{pmatrix} \mathbf{x}_1 \\ \vdots \\ \mathbf{x}_p \end{pmatrix} ({}^t \mathbf{x}_1, \dots, {}^t \mathbf{x}_p) = (\mathbf{x}_i {}^t \mathbf{x}_j) \quad ((i, j) \text{ 成分は } \mathbf{x}_i \text{ と } \mathbf{x}_j \text{ の標準内積}).$$

従って $x {}^t x$ は, ベクトル $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_p$ から得られるグラム行列に他ならない. もちろん $x {}^t x$ は半正定値であり, 「 $x {}^t x = 0 \iff x = 0$ 」である.

§8. JTS と実 Siegel 領域

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値 JTS とし, その正定値内積を $\langle v_1 \mid v_2 \rangle := \text{tr}(x \square y)$ とする. V の極大 tripotent c を一つ固定し, 対応する V の Peirce 分解を $V = V_1(c) \oplus V_{1/2}(c)$ とする. $V_1(c)$ は

$$a \cdot_c b := \{a, c, b\} =: L_c(a)b$$

で c を単位元とする Jordan 代数をなし, $a \mapsto a^* := P(c)a$ は $V_1(c)$ の involutive な JA 自己同型であった. 従って

$$A(c) := \{a \in V_1(c); a^* = a\}$$

は $V_1(c)$ の Jordan 部分代数であるが, Euclid 型になっている.

$$\varphi(a)x := 2\{a, c, x\} \quad (a \in V_1(c), x \in V_{1/2}(c))$$

とおくと, $\varphi: V_1(c) \rightarrow \text{End}(V_{1/2}(c))$ は Jordan 代数 $V_1(a)$ の $*$ 表現である.

$$\Omega := \text{int}\{a \cdot_c a; a \in A(c)\}$$

は $A(c)$ の自己双対な開凸錐である.

$$\langle \varphi(a)x | y \rangle = \langle a | Q(y, x) \rangle \quad (a \in A(c), x, y \in V_{1/2}(c))$$

で $Q(y, x) \in A(c)$ を定めると

$$Q(y, x) = \{y, x, c\} + \{x, y, c\}$$

となり, さらに $Q(x, x) \in \bar{\Omega} (\forall x \in V_{1/2}(c))$ である.

定義. 上記の Ω と Q を用いて得られる領域

$$D(\Omega, Q) := \{x + a; x \in V_{1/2}(c), a \in A(c), a - Q(x, x) \in \Omega\} \subset V_{1/2}(c) \oplus A(c)$$

を JTS $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ の極大 tripotent c に付随する実 Siegel 領域と呼ぶ.

例 8.1. \mathbb{R}^{n+1} を $1 \times (n+1)$ 行列の全体

$$\text{Mat}(1, n+1) = \{X = (\xi | \mathbf{x}); \xi \in \mathbb{R}, \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \text{ (横ベクトル)}\}$$

と見る. 例 7.5 より, $\Omega = \mathbb{R}_{>0}$ (正の実数全体) であり,

$$Q(\mathbf{y}, \mathbf{x}) = \mathbf{y} \cdot \mathbf{x}.$$

従って,

$$\begin{aligned} D(\Omega, Q) &= \{(\xi | \mathbf{x}); \xi - \|\mathbf{x}\|^2 > 0\} \\ &= \{(x_0, x_1, \dots, x_n); x_0 > x_1^2 + \dots + x_n^2\}. \end{aligned}$$

特に平面上での放物線の「上部」 $\{(x, y); x > y^2\}$ は JTS に付随する実 Siegel 領域である.

命題 8.2. $D(\Omega, Q)$ は直線を含まない凸領域である.

証明. まず開集合であることは明らかであろう.

(1) 次に $\bar{\Omega}$ は $A(c)$ の直線を含まないことを示そう. $a_0, a \in A(c)$, $a \neq 0$ として, 任意の $t \in \mathbb{R}$ に対して, $a_0 + ta \in \bar{\Omega}$ となったとする. (7.3) より, 任意の $b \in \bar{\Omega}$ に対して,

$$(8.1) \quad \langle a_0 + ta | b \rangle \geq 0.$$

従って, 任意の $t > 0$ に対して, $t^{-1} \langle a_0 + ta | b \rangle \geq 0$. ここで $t \rightarrow \infty$ とすると, $\langle a | b \rangle \geq 0$ を得る. 再び (7.3) より, $a \in \bar{\Omega}$ である. このとき, (8.1) で $b = a$ とおいて

$$\langle a_0 | a \rangle + t \|a\|^2 > 0$$

$a \neq 0$ であるから、これが任意の $t \in \mathbb{R}$ で成立することはない ($t < 0$ で絶対値が十分大きければ左辺は負である)。ゆえに矛盾が生じた。

さて命題の証明をしよう。 $x_0, x \in V_{1/2}(a)$, $a_0, a \in A(c)$, $x + a \neq 0$ として、任意の $t \in \mathbb{R}$ に対して、 $(x_0 + a_0) + t(x + a) \in D(\Omega, Q)$ とする。このとき

$$(8.2) \quad (a_0 + ta) - Q(x_0 + tx, x_0 + tx) \in \Omega.$$

Ω は錐であるから、任意の $t \neq 0$ に対して

$$\frac{1}{t^2} \{ (a_0 + ta) - Q(x_0 + tx, x_0 + tx) \} \in \Omega.$$

$t \rightarrow \infty$ として、 $-Q(x, x) \in \bar{\Omega}$ 。一方で $Q(x, x) \in \bar{\Omega}$ であるから、 $Q(x, x) \neq 0$ ならば、 $\bar{\Omega}$ は直線 $tQ(x, x)$ を含むことになる。ゆえに $Q(x, x) = 0$ 。命題 7.4 (3) より、 $x = 0$ である。このとき、(8.2) は、 $a_0 + ta - Q(x_0, x_0) \in \Omega (\forall t \in \mathbb{R})$ となる。これは、 $a \neq 0$ より、 Ω が直線を含むことを意味するから矛盾である。以上より、 $D(\Omega, Q)$ は直線を含まないことがわかった。

(2) $D(\Omega, Q)$ が凸集合であることを示そう。 $a + x, a' + x' \in D(\Omega, Q)$ とする。

$$(8.3) \quad a - Q(x, x) \in \Omega, \quad a' - Q(x', x') \in \Omega$$

が成り立っている。このとき、任意の $\lambda (0 \leq \lambda \leq 1)$ に対して、

$$(8.4) \quad \lambda(a + x) + (1 - \lambda)(a' + x') \in D(\Omega, Q)$$

を示そう。

$$\begin{aligned} & \lambda a + (1 - \lambda)a' - Q(\lambda x + (1 - \lambda)x', \lambda x + (1 - \lambda)x') \\ &= \lambda(a - Q(x, x)) + (1 - \lambda)(a' - Q(x', x')) \\ & \quad + \lambda(1 - \lambda)Q(x, x) + \lambda(1 - \lambda)Q(x', x') - \lambda(1 - \lambda)Q(x, x') - \lambda(1 - \lambda)Q(x', x) \\ &= \lambda(a - Q(x, x)) + (1 - \lambda)(a' - Q(x', x')) + \lambda(1 - \lambda)Q(x - x', x - x'). \end{aligned}$$

(8.3) と Ω が凸であることより

$$\lambda(a - Q(x, x)) + (1 - \lambda)(a' - Q(x', x')) \in \Omega$$

そして $Q(x - x', x - x') \in \bar{\Omega}$ であるから

$$\lambda a + (1 - \lambda)a' - Q(\lambda x + (1 - \lambda)x', \lambda x + (1 - \lambda)x') \in \Omega + \bar{\Omega} \subset \Omega$$

となるから、(8.4) が示せた。

凸集合であるから、連結であることは明らかである。 □

$D(\Omega, Q)$ には群が推移的に作用していることを示そう。まず

$$G(\Omega) := \{g \in GL(A(c)) ; g(\Omega) = \Omega\}$$

とする。 Ω が自己双対であることから、 $G(\Omega)$ は reductive な Lie 群 ($g \in G(\Omega)$ ならば $g^* \in G(\Omega)$) である。 $G(\Omega)$ が Ω に推移的に作用していることを見るためにさらに

$$P_c(a) := 2L_c(a)^2 - L_c(a \cdot_c a) \quad (a \in A(c))$$

とおく。

命題 8.3. $a \in A(c)$ とする。

- (1) $P_c(a^n) = P_c(a)^n$ (ただし, $a^1 = a, a^n := a \cdot_c a^{n-1}$) .
- (2) a が可逆元ならば $P_c(a) \in G(\Omega)$ で, $P_c(a^{-1}) = P_c(a)^{-1}$.
- (3) $P_c(a)c = a^2$.

$\Omega = \{a \cdot_c a ; a \in A(c) \text{ は可逆}\}$ でもあるので、命題 8.3 の (3), (4) より、 $G(\Omega)$ が Ω に推移的に働いていることがわかる。

例 8.4. Jordan 代数 $\text{Sym}(n, \mathbb{R})$ において考える。 Jordan 積は $L(a)b := \frac{1}{2}(ab + ba)$ である。このとき

$$2L(a)^2b - L(a^2)b = \frac{1}{2}\{a(ab + ba) + (ab + ba)a - a^2b - ba^2\} = aba.$$

従って、上で導入した $P(a)$ はここでは、 $P(a)b = aba$ という作用素になっている。

補題 8.5. $a, b \in A(c)$ かつ $x, y \in V_{1/2}(c)$ とする。

- (1) $\varphi(P_c(b)a) = \varphi(b)\varphi(a)\varphi(b)$.
- (2) $P_c(b)Q(y, x) = Q(\varphi(b)y, \varphi(b)x)$.

証明. (1) φ は Jordan 代数 $A(c)$ の表現であるから、 $\varphi(L_c(b)a) = L_{\varphi(b)}\varphi(a)$ (右辺は Jordan 代数 $\text{Sym}(V_{1/2}(c))$ での演算)。結論は例 8.4 より従う。

(2) 作用素 $\varphi(b)$, $P_c(b)$ は自己共役であることに注意して、(1) より

$$\begin{aligned} \langle a | Q(\varphi(b)y, \varphi(b)x) \rangle &= \langle \varphi(a)\varphi(b)x | \varphi(b)y \rangle = \langle \varphi(b)\varphi(a)\varphi(b)x | y \rangle \\ &= \langle \varphi(P_c(b)a)x | y \rangle = \langle P_c(b)a | Q(y, x) \rangle \\ &= \langle a | P_c(b)Q(y, x) \rangle. \quad \square \end{aligned}$$

5節で導入した V の JTS 自己同型の全体がなす群をここでは $\text{Aut}_{\text{JT}}(V)$ で表す。補題 5.7 より $\text{Aut}_{\text{JT}}(V)$ は V の直交群 $O(V)$ の閉部分群, 従ってコンパクトである。

$$K := \{k \in \text{Aut}_{\text{JT}}(V) ; kc = c\}$$

とおく。

補題 8.6. K は $V_1(c)$, $A(c)$ を不変にし, $K|_{V_1(c)} \subset \text{Aut}_{\text{JA}}(V_1(c))$ であり, $K|_{A(c)} \subset \text{Aut}_{\text{JA}}(A(c))$ である。従って, $K|_{A(c)} \subset G(\Omega)$ である。

(2) $k \in K$ とすると, 任意の $x, y \in V_{1/2}(c)$ に対して, $kQ(x, y) = Q(kx, ky)$.

証明. $k \in K$ かつ $a \in V_1(c)$ のとき

$$\{c, c, ka\} = k\{c, c, a\} = ka.$$

これは $ka \in V_1(c)$ であることを示す。このとき, $a, b \in V_1(c)$ ならば

$$k(a \cdot_c b) = k\{a, c, b\} = \{ka, c, kb\} = (ka) \cdot_c (kb).$$

ゆえに $k|_{V_1(c)} \in \text{Aut}_{\text{JA}}(V_1(c))$ 。さらに

$$(ka)^* = \{c, ka, c\} = k\{c, a, c\} = ka^*.$$

これより, $k(A(c)) \subset A(c)$ がわかる。そうすると, $k|_{A(c)} \in \text{Aut}_{\text{JA}}(A(c))$ である。よって, $a \in A(c)$ のとき, $k(a \cdot_c a) = (ka) \cdot_c (ka)$ となるから, $k|_{A(c)} \in G(\Omega)$ である。

(2) 定義から

$$kQ(x, y) = k\{x, y, c\} + k\{y, x, c\} = \{kx, ky, c\} + \{y, x, c\} = Q(kx, ky). \quad \square$$

例 8.7. 例 5.8 で, $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ のとき, $k_1 \in O(p)$, $k_2 \in O(q)$ に対して

$$T_{k_1, k_2} v = k_1 v k_2^{-1} \quad (v \in V)$$

とおくと, $T_{k_1, k_2} \in \text{Aut}_{\text{JT}}(V)$ であつた。以下 $p < q$ とし, 極大 tripotent $c := (I_p | O)$ を考える。このとき

$$T_{k_1, k_2} c = c \iff k_2 = \begin{pmatrix} k_1 & O \\ O & k_3 \end{pmatrix} \quad (k_3 \in O(q-p)).$$

次に

$$H_Q := \left\{ h_{B, C} ; \begin{array}{l} B \in GL(V_{1/2}(c)), C \in GL(\Omega), \\ C(Q(x, y)) = Q(Bx, By) (\forall x, y \in V_{1/2}(c)) \end{array} \right\}$$

とおく。明らかに H_Q は群をなす。そして補題 8.5 (2) と補題 8.6 (2) より

任意の $b \in \Omega$ に対して $h_{\varphi(b), P_c(b)} \in H_Q$, $k \in K$ ならば $h_{k, k} \in H_Q$.

さて, $\rho(h_{B,C}) = C$ とおくと明らかに $\rho: H_Q \rightarrow G(\Omega)$ は群準同型である. 以上より

系 8.8. $\rho(H_Q)$ は Ω に推移的に働く.

各 $y \in V_{1/2}(c)$ に対して $n_y \in \text{Aff}(V_{1/2} \oplus A(c))$ を

$$(8.5) \quad n_y(x+a) := (x+y) + (a+2Q(x,y) + Q(y,y))$$

で定義する. 行列形で書くと

$$n_y = \left(\begin{array}{cc|c} I & O & y \\ \hline 2Q(\cdot, y) & I & Q(y, y) \\ 0 & 0 & 1 \end{array} \right).$$

この行列が $\begin{pmatrix} x \\ a \\ 1 \end{pmatrix}$ に作用すると見ればよい. $V_{1/2}(c)$ を加法群と見るとき, $y \mapsto n_y$ は, 簡単な計算でわかるように, 群準同型である: $n_{y+y'} = n_y n_{y'}$. 以下

$$N := \{n_y; y \in V_{1/2}(c)\}$$

とおく. N は可換群である. また, 自然に $H_Q \hookrightarrow \text{Aff}(V_{1/2}(c) \oplus A(c))$ とする:

$$h_{B,C} = \left(\begin{array}{cc|c} B & O & 0 \\ O & C & 0 \\ \hline 0 & 0 & 1 \end{array} \right).$$

補題 8.9. N も H_Q も実 Siegel 領域 $D(\Omega, Q)$ を不変にする.

証明. $x+a \in D(\Omega, Q)$ とすると, $a - Q(x, x) \in \Omega$ である.

(1) $x' + a' = n_y(x+a)$ とおく. (8.5) より

$$x' = x + y, \quad a' = a + 2Q(x, y) + Q(y, y).$$

ゆえに

$$\begin{aligned} a' - Q(x', x') &= a + 2Q(x, y) + Q(y, y) - Q(x+y, x+y) \\ &= a - Q(x, x) \in D(\Omega, Q). \end{aligned}$$

よって N は $D(\Omega, Q)$ を不変にする.

(2) $x' + a' = h_{B,C}(x+a)$ とおくと, $x' = Bx$, $a' = Ca$ である. ゆえに

$$a' - Q(x', x') = Ca - Q(Bx, Bx) = C(a - Q(x, x)) \in \Omega.$$

これは H_Q が $D(\Omega, Q)$ を不変にすることを示す. □

補題 8.10. $h_{B,c}n_y h_{B,C}^{-1} = n_{By}$. すなわち H_Q は N を正規化する.

証明. 次の行列の計算を実行すればよい:

$$\left(\begin{array}{cc|c} B & O & 0 \\ O & C & 0 \\ \hline 0 & 0 & 1 \end{array} \right) \left(\begin{array}{cc|c} I & O & y \\ 2Q(\cdot, y) & I & Q(y, y) \\ \hline 0 & 0 & 1 \end{array} \right) \left(\begin{array}{cc|c} B^{-1} & O & 0 \\ O & C^{-1} & 0 \\ \hline 0 & 0 & 1 \end{array} \right).$$

$CQ(B^{-1}(\cdot), y) = Q(\cdot, By)$ 等に注意. □

補題 8.10 により, 半直積 $N \rtimes H_Q$ を作る.

$$\begin{array}{l|l} \text{群演算} & (n_y, h_{B,C})(n_{y'}, h_{B',C'}) = (n_{y+By'}, h_{BB',CC'}) \\ \text{単位元} & (n_0, h_{I,I}) \\ \text{逆元} & (n_y, h_{B,C})^{-1} = (n_{-B^{-1}y}, h_{B^{-1},C^{-1}}) \end{array}$$

命題 8.11. $N \rtimes H_Q$ は $D(\Omega, Q)$ に推移的に作用する.

証明. $c \in \Omega$ ゆえ, $0+c \in D(\Omega, Q)$ である. 定義より計算すると

$$n_y h_{B,C}(0+c) = (y, Cc + Q(y, y)).$$

これが任意の $x+a \in D(\Omega, Q)$ になれたらよい. 連立方程式

$$\begin{cases} y = x \\ Cc + Q(y, y) = a \end{cases}$$

を解くことになるが, これは簡単に, $y = x, Cc = a - Q(x, x)$ となる. $a - Q(x, x) \in \Omega$ であるから, これを b^2 ($b \in \Omega$) と書き, $h_{\varphi(b), P_c(b)} \in H_Q$ を考えると, $P_c(b)c = b^2 = a - Q(x, x)$ ゆえ, $n_x h_{\varphi(b), P_c(b)}(0+c) = x+a$ となる. □

§9. 多項式写像のなす Lie 代数

定義. L を実または複素ベクトル空間とする (無限次元でもよい). 双線型写像 $[\cdot, \cdot]: L \times L \rightarrow L$ が与えられているとする. L が Lie 代数であるとは, 次の (1), (2) がみたされていること:

(1) $[y, x] = -[x, y]$ ($\forall x, y \in L$),

(2) (**Jacobi identity**) $[x, [y, z]] + [y, [z, x]] + [z, [x, y]] = 0$ ($\forall x, y, z \in L$).

例 9.1. V 上の線型写像の全体 $\text{End}(V)$ は, $[S, T] := ST - TS$ により, Lie 代数をなす. この Lie 代数を $\mathfrak{gl}(V)$ で表す.

以下しばらくは V を n 次元の実または複素ベクトル空間とする. V から V への k 次斉次多項式写像の全体を $\mathcal{P}_k(V)$ で表す. ただし, $p \in \mathcal{P}_k(V)$ であるとは, e_1, \dots, e_n を V の基底とし (固定), 各 $x \in V$ を $x = \sum_{i=1}^n x_i e_i$ と書いて V に座標を導入するとき, V 上の k 次斉次多項式函数 (x_1, \dots, x_n の k 次斉次多項式) $p_1(x), \dots, p_n(x)$ でもって

$$p(x) = \sum_{i=1}^n p_i(x) e_i$$

と表されることである. $\mathcal{P}_0(V) \equiv V$ (定値函数), $\mathcal{P}_1(V) = \text{End}(V)$ である. $\mathcal{P}(V) = \sum_{k=0}^{\infty} \mathcal{P}_k(V)$ (代数直和) は, V から V への多項式写像全体である.

さて, 各 $p, q \in \mathcal{P}(V)$ に対して

$$(p \cdot q)(x) := \left. \frac{d}{dt} p(x + tq(x)) \right|_{t=0}$$

とおく. 成分で表示してみよう.

$$(9.1) \quad p(x) = \sum_{i=1}^n p_i(x) e_i, \quad q(x) = \sum_{i=1}^n q_i(x) e_i$$

とおくとき,

$$(9.2) \quad (p \cdot q)(x) = \sum_{i=1}^n \frac{\partial p}{\partial x_i}(x) q_i(x) = \sum_{j=1}^n \left(\sum_{i=1}^n \frac{\partial p_j}{\partial x_i}(x) q_i(x) \right) e_j.$$

これより, 積 $p, q \mapsto p \cdot q$ が双線型であることは明らかであろう. この積 $p \cdot q$ の結合子を $[p, q, r]$ と書く. すなわち

$$[p, q, r] := p \cdot (q \cdot r) - (p \cdot q) \cdot r \quad (p, q, r \in \mathcal{P}(V)).$$

補題 9.2. この結合子は右対称である. すなわち

$$[p, q, r] = [p, r, q].$$

証明. 各 p, q, r を (9.1) にように成分で書いておく. このとき, (9.2) より

$$\begin{aligned} (p \cdot (q \cdot r))(x) &= \left. \frac{d}{dt} p \left(x + t \sum_{i=1}^n \frac{\partial q}{\partial x_i}(x) r_i(x) \right) \right|_{t=0} \\ &= \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial p}{\partial x_j}(x) \frac{\partial q_j}{\partial x_i}(x) r_i(x). \end{aligned}$$

同様にして

$$\begin{aligned}
 ((p \cdot q) \cdot r)(x) &= \frac{d}{dt}(p \cdot q)(x + tr(x)) \Big|_{t=0} \\
 &= \frac{d}{dt} \sum_{i=1}^n \frac{\partial p}{\partial x_i}(x + tr(x)) q_i(x + tr(x)) \Big|_{t=0} \\
 &= \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial^2 p}{\partial x_j \partial x_i}(x) r_j(x) q_i(x) + \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial p}{\partial x_i}(x) \frac{\partial q_i}{\partial x_j}(x) r_j(x).
 \end{aligned}$$

以上より

$$[p, q, r](x) = - \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial^2 p}{\partial x_j \partial x_i}(x) r_j(x) q_i(x)$$

となつて、これは q, r に関して対称である。 □

次に交換子を考えよう： $[p, q] := p \cdot q - q \cdot p$. そうすると、(9.2) より

$$\begin{aligned}
 [p, q](x) &= \sum_{i=1}^n \left(\frac{\partial p}{\partial x_i}(x) q_i(x) - \frac{\partial q}{\partial x_i}(x) p_i(x) \right) \\
 &= \sum_{j=1}^n \sum_{i=1}^n \left(\frac{\partial p_j}{\partial x_i}(x) q_i(x) - \frac{\partial q_j}{\partial x_i}(x) p_i(x) \right) e_j.
 \end{aligned}$$

これは2個のベクトル場

$$p(x) \frac{\partial}{\partial x} := \sum_{i=1}^n p_i(x) \frac{\partial}{\partial x_i}, \quad q(x) \frac{\partial}{\partial x} := \sum_{i=1}^n q_i(x) \frac{\partial}{\partial x_i}$$

の Poisson 括弧積

$$\left[p(x) \frac{\partial}{\partial x}, q(x) \frac{\partial}{\partial x} \right] = \sum_{j=1}^n \sum_{i=1}^n \left(p_i(x) \frac{\partial q_j}{\partial x_i}(x) - q_i(x) \frac{\partial p_j}{\partial x_i}(x) \right) \frac{\partial}{\partial x_j}$$

の -1 倍に対応している。

命題 9.3. $\mathcal{P}(V)$ は交換子 $[p, q]$ で Lie 代数をなす (無限次元)。

証明. $[q, p] = -[p, q]$ は明らかなので、Jacobi 等式の成立を確かめればよい。定義より

$$\begin{aligned}
 &[p, [q, r]] + [q, [r, p]] + [r, [p, q]] \\
 &= p \cdot (q \cdot r - r \cdot q) - (q \cdot r - r \cdot q) \cdot p \\
 &\quad + q \cdot (r \cdot p - p \cdot r) - (r \cdot p - p \cdot r) \cdot q \\
 &\quad + r \cdot (p \cdot q - q \cdot p) - (p \cdot q - q \cdot p) \cdot r \\
 &= [p, q, r] + [q, r, p] + [r, p, q] - [p, r, q] - [q, p, r] - [r, q, p].
 \end{aligned}$$

補題 9.2 より, 最後の項は 0 である. □

補題 9.4. (1) $[\mathcal{P}_k(V), \mathcal{P}_l(V)] \subset \mathcal{P}_{k+l-1}(V)$ (ただし $\mathcal{P}_{-1}(V) := \{0\}$ とする).

(2) Lie 代数として, $\mathcal{P}_1(V) = \mathfrak{gl}(V)$.

(3) $T \in \mathcal{P}_1(V)$, $b \in \mathcal{P}_0(V)$ のとき, $[T, b] = Tb$.

証明. (1) 表示式 (9.2) より明らかであろう.

(2) $S, T \in \mathcal{P}_1(V)$ のとき

$$(S \cdot T)(x) = \left. \frac{d}{dt} S(x + tTx) \right|_{t=0} = STx.$$

ゆえに $[S, T] = S \cdot T - T \cdot S = ST - TS$.

(3) 定義から

$$(T \cdot b)(x) = \left. \frac{d}{dt} T(x + tb) \right|_{t=0} = Tb.$$

明らかに $b \cdot T = 0$ であるから, $[T, b] = Tb$. □

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値 JTS とする. 作用素

$$(x \square y)z := \{x, y, z\}, \quad P(x)y := \{x, y, x\}$$

を思い出しておこう. また V には内積 $\langle x | y \rangle := \text{tr}(x \square y)$ が入っている. 各 $b \in V$ に対して

$$p_b(x) := P(x)b = \{x, b, x\} \quad (x \in V)$$

とおく. 明らかに $p_b \in \mathcal{P}_2(V)$ であり, 対応 $V \ni b \mapsto p_b \in \mathcal{P}_2(V)$ は線型である.

補題 9.5. 対応 $V \ni b \mapsto p_b \in \mathcal{P}_2(V)$ は単射である.

証明. $p_b = 0$ とすると, 任意の $x \in V$ に対して, $\{x, b, x\} = 0$. 任意に $y \in V$ を持ってきて, x の代わりに $x + y$ と置くことにより, $\{x, b, y\} = 0$ となる (3項積は第1変数と第3変数に関して対称であるので). ゆえに $x \square b = 0$ となり, これより $\langle x | b \rangle = \text{tr}(x \square b) = 0$ ($\forall x$) が出るから, $b = 0$ である. □

補題 9.6. $a, b \in V$ のとき, $[p_b, a] = 2a \square b$.

証明. 定義より, $x \in V$ のとき

$$\begin{aligned} [p_b, a](x) &= \left. \frac{d}{dt} p_b(x + ta) \right|_{t=0} = \left. \frac{d}{dt} \{x + ta, b, x + ta\} \right|_{t=0} \\ &= 2\{a, b, x\} = 2(a \square b)x \end{aligned}$$

となって証明終わり. □

定義. $\text{End}(V)$ の部分空間 $\mathfrak{str}(V)$ を次で定義する :

$$\mathfrak{str}(V) := \left\{ T \in \text{End}(V); \quad T\{x, y, z\} = \{Tx, y, z\} - \{x, T^*y, z\} + \{x, y, Tz\} \quad (\forall x, y, z \in V) \right\}.$$

ただし, T^* は内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ に関する T の共役作用素である. 次の補題で $\mathfrak{str}(V)$ は Lie 代数をなすことがわかるので, $\mathfrak{str}(V)$ を JTS V の構造代数と呼ぶ.

$T \in \text{End}(V)$ のとき, 明らかに

$$(9.3) \quad T \in \mathfrak{str}(V) \iff [T, x \square y] = (Tx) \square y - x \square (T^*y) \quad (\forall x, y \in V).$$

注意 9.7. JT identity と $(a \square b)^* = b \square a$ であることから, 任意の $a, b \in V$ に対して, $a \square b \in \mathfrak{str}(V)$ である.

補題 9.8. $\mathfrak{str}(V)$ は $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数である.

証明. $S, T \in \mathfrak{str}(V)$ とする. このとき, 任意の $x, y \in V$ に対して,

$$\begin{aligned} [[S, T], x \square y] &= -[[T, x \square y], S] - [[x \square y, S], T] \quad (\text{Jacobi identity}) \\ &= -[(Tx) \square y - x \square T^*y, S] + [(Sx) \square y - x \square (S^*y), T] \quad ((11.3)) \\ &= (STx) \square y - (Tx) \square (S^*y) - (Sx) \square (T^*y) + x \square (S^*T^*y) \\ &\quad - (TSx) \square y + (Sx) \square (T^*y) + (Tx) \square (S^*y) - x \square (T^*S^*y) \\ &= ((ST - TS)x) \square y - x \square ((T^*S^* - S^*T^*)y). \end{aligned}$$

(11.3) より, これは $[S, T] \in \mathfrak{str}(V)$ であることを示している. □

補題 9.9. $T \in \mathfrak{str}(V)$, $b \in V$ のとき, $[p_b, T] = p_{T^*b}$.

証明. 定義より

$$\begin{aligned} [p_b, T](x) &= \left. \frac{d}{dt} p_b(x + tTx) \right|_{t=0} - \left. \frac{d}{dt} T(x + tp_b(x)) \right|_{t=0} \\ &= \left. \frac{d}{dt} \{x + tTx, b, x + tTx\} \right|_{t=0} - Tp_b(x) \\ &= 2\{x, b, Tx\} - TP(x)b \\ &= 2(x \square b)Tx - T(x \square b)x. \end{aligned}$$

ここで (11.3) より, $T(x \square b) = (x \square b)T + (Tx) \square b - x \square (T^*b)$ であるから

$$\begin{aligned} [p_b, T](x) &= (x \square b)Tx - ((Tx) \square b)x + (x \square (T^*b))x \\ &= p_{T^*b}(x). \quad \square \end{aligned}$$

補題 9.10. $b, c \in V$ のとき, $[p_b, p_c] = 0$.

証明. 定義より

$$\begin{aligned} (p_b \cdot p_c)(x) &= \frac{d}{dt} p_b(x + tp_c(x)) \Big|_{t=0} = \frac{d}{dt} \{x + tp_c(x), b, x + tp_c(x)\} \Big|_{t=0} \\ &= 2\{x, b, P(x)c\} = 2(x \square b)P(x)c \\ &= 2P(x)(b \square x)c \quad (\text{命題 2.1 (1)}) \\ &= 2P(x)\{b, x, c\}. \end{aligned}$$

最後の項は b, c に関して対称であるから, $[p_b, p_c] = 0$ である. \square

以下, $V \square V := \text{span}\{x \square y; x, y \in V\}$ とおく. JT identity より, $V \square V$ は $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数であり, また $V \square V \subset \text{str}(V)$ でもある (注意 9.7).

定義. $\mathcal{P}(V)$ の部分空間 $\mathfrak{g}(k)$ ($k = -1, 0, 1$) を次で定義する:

$$\mathfrak{g}(-1) := \mathcal{P}_0(V) = V, \quad \mathfrak{g}(0) := V \square V \subset \mathcal{P}_1(V), \quad \mathfrak{g}(1) := \{p_b; b \in V\} \subset \mathcal{P}_2(V).$$

命題 9.11. $|k| > 1$ のとき $\mathfrak{g}(k) = \{0\}$ と約束すると, $[\mathfrak{g}(i), \mathfrak{g}(j)] \subset \mathfrak{g}(i+j)$ が成り立つ. 特に $\mathfrak{g}(\pm 1)$ は可換な Lie 代数になっている. $\mathfrak{g}(0)$ も Lie 代数をなしている.

証明. (1) $[p_b, a] = 2a \square b$ (補題 9.6) より, $[\mathfrak{g}(1), \mathfrak{g}(-1)] \subset \mathfrak{g}(0)$.

(2) $[p_b, c \square d] = p_{(d \square c)b}$ (補題 9.9) より, $[\mathfrak{g}(1), \mathfrak{g}(0)] \subset \mathfrak{g}(1)$.

(3) 補題 9.10 より, $[\mathfrak{g}(1), \mathfrak{g}(1)] \subset \{0\}$.

(4) JT identity より, $[\mathfrak{g}(0), \mathfrak{g}(0)] \subset \mathfrak{g}(0)$.

(5) 補題 9.4 (3) より, $[\mathfrak{g}(0), \mathfrak{g}(-1)] \subset \mathfrak{g}(-1)$.

(6) $[\mathfrak{g}(-1), \mathfrak{g}(-1)] = \{0\}$ は明らか. \square

定理 9.12. $\mathfrak{g} := \mathfrak{g}(-1) + \mathfrak{g}(0) + \mathfrak{g}(1)$ は $\mathcal{P}(V)$ の有限次元の部分 Lie 代数である. ブラケット積は次のように記述される:

$$\begin{aligned} [a + T + p_b, a' + T' + p_{b'}] &= a'' + T'' + p_{b''} \quad \text{with} \\ \begin{cases} a'' = Ta' - T'a \\ T'' = 2a' \square b + [T, T'] - 2a \square b' \\ b'' = (T')^*b - T^*b' \end{cases} \end{aligned}$$

定義. この \mathfrak{g} を正定値 JTS V に付随する Koecher–Tits の Lie 代数と呼ぶ.

§10. Koecher–Tits の Lie 代数

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値 JTS とする. 記号の復習をしておこう:

$$(x \square y)z = \{x, y, z\}, \quad P(x)y = \{x, y, x\} = p_y(x).$$

次に, $\mathfrak{g}(-1) := V$, $\mathfrak{g}(0) := V \square V$, $\mathfrak{g}(1) := \{p_b; b \in V\}$ とおき, V 上の多項式写像の全体のなす Lie 代数 $\mathcal{P}(V)$ の中で, $\mathfrak{g} := \mathfrak{g}(-1) + \mathfrak{g}(0) + \mathfrak{g}(1)$ を考えると, \mathfrak{g} はその部分 Lie 代数であって, ブラケット積は次のように記述される:

$$(10.1) \quad \begin{aligned} [a + T + p_b, a' + T' + p_{b'}] &= a'' + T'' + p_{b''} \quad \text{with} \\ \begin{cases} a'' = Ta' - T'a \\ T'' = 2a' \square b + [T, T'] - 2a \square b' \\ b'' = (T')^*b - T^*b' \end{cases} \end{aligned}$$

この Lie 代数 \mathfrak{g} を **Koecher–Tits の Lie 代数** と呼んだ.

一般に L を Lie 代数とすると, 各 $x \in L$ に対して, L 上の線型作用素 $\text{ad } x$ を次で定義する:

$$(\text{ad } x)y := [x, y] \quad (y \in L).$$

対応 $L \ni x \mapsto \text{ad } x \in \text{End}(L)$ も線型であることに注意.

補題 10.1. $\text{ad} : x \mapsto \text{ad } x$ は Lie 代数 L の表現になっている: 線型性の他に

$$\text{ad}[x, y] = [\text{ad } x, \text{ad } y] (= (\text{ad } x)(\text{ad } y) - (\text{ad } y)(\text{ad } x)) \quad (\forall x, y \in L).$$

この表現 ad を Lie 代数 L の随伴表現 (**adjoint representation**) という.

証明. 任意の $z \in L$ に対して,

$$\begin{aligned} (\text{ad}[x, y])z &= [[x, y], z] = -[[y, z], x] - [[z, x], y] \quad (\text{Jacobi 等式より}) \\ &= [x, [y, z]] - [y, [x, z]] \\ &= (\text{ad } x)(\text{ad } y)z - (\text{ad } y)(\text{ad } x)z \end{aligned}$$

となつて, $\text{ad}[x, y] = [\text{ad } x, \text{ad } y]$ が出る. □

Koecher–Tits の Lie 代数 \mathfrak{g} に戻ろう.

補題 10.2. (1) V 上の恒等作用素を I_V とするとき, $I_V \in V \square V = \mathfrak{g}(0)$.

(2) $\mathfrak{g}(k) = \{X \in \mathfrak{g}; (\text{ad}(-I_V))X = kX\}$ ($k = 0, \pm 1$).

証明. (1) $n = \dim V$ とし, e_1, \dots, e_n を V の内積 $\langle v | v' \rangle = \text{tr}(v \square v')$ に関する正規直交基底とする. $I_V = \sum_{j=1}^n e_j \square e_j$ となることを示そう. そうすると $I_V \in V \square V$ となる. 任意の $v, v' \in V$ に対して

$$\begin{aligned} \sum_{j=1}^n \langle (e_j \square e_j) v | v' \rangle &= \sum_{j=1}^n \langle (v \square e_j) e_j | v' \rangle = \sum_{j=1}^n \langle e_j | (e_j \square v) v' \rangle \\ &= \sum_{j=1}^n \langle e_j | (v' \square v) e_j \rangle = \sum_{j=1}^n \langle (v \square v') e_j | e_j \rangle \\ &= \text{tr}(v \square v') = \langle v | v' \rangle. \end{aligned}$$

$v' \in V$ は任意であるから, $\sum_{j=1}^n (e_j \square e_j) = I_V$ である.

(2) (10.1) より, $a, b \in V, T \in \mathfrak{g}(0)$ のとき,

$$[I_V, a] = a, \quad [I_V, T] = 0, \quad [I_V, p_b] = -p_b$$

であるので, 証明終わり. □

定義. $\sigma(a + T + p_b) := -b - T^* - p_a$ ($a, b \in V, T \in \mathfrak{g}(0)$) とおく.

明らかに σ は \mathfrak{g} 上の線型作用素である.

補題 10.3. σ は Lie 代数 \mathfrak{g} の自己同型で, $\sigma^2 = I$ かつ $\sigma \mathfrak{g}(k) = \mathfrak{g}(-k)$ ($k = 0, \pm 1$) をみたす.

証明. 自己準同型の部分だけが明らかではない. $a, a', b, b' \in V, T, T' \in \mathfrak{g}(0)$ のとき, (10.1) より

$$\begin{aligned} \sigma[a + T + p_b, a' + T' + p_{b'}] &= \sigma(a'' + T'' + p_{b''}) = -b'' - (T'')^* - p_{a''} \\ &= -(T')^* b + T^* b' - (2b \square a' + [T, T']^* - 2b' \square a) - p_{T a' - T' a}. \end{aligned}$$

ここで, $[T, T']^* = [(T')^*, T^*]$ であるから,

$$\begin{aligned} \sigma[a + T + p_b, a' + T' + p_{b'}] &= [b + T^* + p_a, b' + (T')^* + p_{a'}] \\ &= [\sigma(a + T + p_b), \sigma(a' + T' + p_{b'})] \end{aligned}$$

となって証明が終わる. □

定義. L を Lie 代数とする. L 上の双線型形式

$$B(x, y) := \text{tr}((\text{ad } x)(\text{ad } y)) \quad (x, y \in L)$$

を L の **Killing** 形式と呼ぶ.

- 明らかに $B(y, x) = B(x, y)$ ($\forall x, y \in L$) が成り立つ.

補題 10.4. 次が成り立つ:

$$B((\text{ad } x)y, z) = -B(y, (\text{ad } x)z) \quad (\forall x, y, z \in L).$$

証明. 定義により

$$\begin{aligned} B((\text{ad } x)y, z) &= B([x, y], z) = \text{tr}((\text{ad}[x, y])(\text{ad } z)) \\ &= \text{tr}((\text{ad } x)(\text{ad } y)(\text{ad } z) - (\text{ad } y)(\text{ad } x)(\text{ad } z)) \quad (\text{補題 10.1}) \\ &= \text{tr}((\text{ad } y)(\text{ad } z)(\text{ad } x) - (\text{ad } y)(\text{ad } x)(\text{ad } z)) \\ &= \text{tr}((\text{ad } y)[\text{ad } z, \text{ad } x]) = -\text{tr}((\text{ad } y)(\text{ad}[x, z])) \\ &= -B(y, [x, z]) = -B(y, (\text{ad } x)z) \end{aligned}$$

となつて証明終わり. □

再び Koecher–Tits の Lie 代数 \mathfrak{g} に戻る. 以下 B は \mathfrak{g} の Killing 形式, B_0 は $\mathfrak{g}(0)$ の Killing 形式とする.

命題 10.5. $X = a + T + p_b$, $X' = a' + T' + p_{b'}$ ($a, a', b, b' \in V$, $T, T' \in \mathfrak{g}(0)$) のとき

$$B(X, X') = B_0(T, T') + 2 \text{tr}(TT') - 4\langle a | b' \rangle - 4\langle b | a' \rangle.$$

証明. (10.1) より

$$\begin{aligned} (\text{ad } T)(a' + T' + p_{b'}) &= T a' + [T, T'] - p_{T^* b'} \\ &= T a' + [T, T'] - (\sigma T^* \sigma) p_{b'}. \end{aligned}$$

ゆえに $\mathfrak{g} = \mathfrak{g}(-1) + \mathfrak{g}(0) + \mathfrak{g}(1)$ 上の線型作用素 $\text{ad } T$ はブロック対角型で

$$\text{ad } T = \begin{pmatrix} T & & \\ & \text{ad}_{\mathfrak{g}(0)} T & \\ & & -\sigma T^* \sigma \end{pmatrix}.$$

従つて

$$(\text{ad } T)(\text{ad } T') = \begin{pmatrix} TT' & & \\ & (\text{ad}_{\mathfrak{g}(0)} T)(\text{ad}_{\mathfrak{g}(0)} T') & \\ & & \sigma T^*(T')^* \sigma \end{pmatrix}.$$

σ は線型同型 $\mathfrak{g}(1) \xrightarrow{\sim} \mathfrak{g}(-1)$ を与えているので,

$$\begin{aligned} (10.2) \quad B(T, T') &= \text{tr}((\text{ad } T)(\text{ad } T')) = \text{tr}(TT') + B_0(T, T') + \text{tr}(T^*(T')^*) \\ &= 2 \text{tr}(TT') + B_0(T, T'). \end{aligned}$$

次に

$$\begin{aligned}
B(a, p_b) &= B([I_V, a], p_b) && \text{(by (10.1))} \\
&= B(I_V, [a, p_b]) && \text{(補題 10.4)} \\
&= -2B(I_V, a \square b) && \text{(by (10.1))} \\
&= -4 \operatorname{tr}(a \square b) - 2B_0(I_V, a \square b) && \text{(by (10.2))} \\
&= -4 \langle a | b \rangle && (\because \operatorname{ad}_{\mathfrak{g}(0)} I_V = 0).
\end{aligned}$$

さらに $j + k \neq 0$ のとき

$$\begin{aligned}
j \cdot B(\mathfrak{g}(j), \mathfrak{g}(k)) &= B([-I_V, \mathfrak{g}(j)], \mathfrak{g}(k)) && \text{(補題 10.2 (2))} \\
&= B(\mathfrak{g}(j), [I_V, \mathfrak{g}(k)]) && \text{(補題 10.4)} \\
&= -k \cdot B(\mathfrak{g}(j), \mathfrak{g}(k)) && \text{(補題 10.2 (2))}
\end{aligned}$$

より, $B(\mathfrak{g}(j), \mathfrak{g}(k)) = \{0\}$ が出る. 以上より

$$\begin{aligned}
B(a + T + p_b, a' + T' + p_{b'}) &= B(a, p_{b'}) + B(T, T') + B(p_b, a') \\
&= -4 \langle a | b' \rangle + 2 \operatorname{tr}(TT') + B_0(TT') - 4 \langle b | a' \rangle
\end{aligned}$$

となって証明が終わる. □

定理 10.6. B は非退化である. 従って, Koecher-Tits の Lie 代数 \mathfrak{g} は半単純 (Cartan の判定基準).

証明. $X = a + T + p_b \in \mathfrak{g}$ ($a, b \in V, T \in \mathfrak{g}(0)$) が, 任意の $X' \in \mathfrak{g}$ に対して, $B(X, X') = 0$ をみたすとする. $X' = a' \in V$ ととると, 命題 10.5 より

$$0 = B(X, a') = -4 \langle b | a' \rangle.$$

$a' \in V$ は任意であるから, $b = 0$. 次に $b' \in V$ は任意であるとして

$$0 = B(X, p_{b'}) = -4 \langle a | b' \rangle.$$

これより $a = 0$ が出る. よって $X = T \in \mathfrak{g}(0)$. さらに $a', b' \in V$ を任意として, $2a' \square b' \in \mathfrak{g}(0)$ を考えると,

$$\begin{aligned}
0 &= B(T, 2a' \square b') = B(T, [p_{b'}, a']) && \text{(((10.1) より)} \\
&= B([a', T], p_{b'}) = -B(Ta', p_{b'}) && \text{(補題 10.4 と (10.1) より)} \\
&= 4 \langle Ta' | b' \rangle && \text{(命題 10.5 より)}.
\end{aligned}$$

ゆえに $T = 0$ である. 以上で B が非退化であることが示された. □

(10.1) より, $a, b \in V$ ならば

$$a \square b = -\frac{1}{2}[a, p_b] = \frac{1}{2}[a, \sigma b].$$

特に $[\mathfrak{g}(-1), \mathfrak{g}(1)] = \mathfrak{g}(0)$ であることもわかる. 従って, $a, b, c \in V$ のとき

$$\begin{aligned} \{a, b, c\} &= (a \square b)c = [a \square b, c] && \text{(by (10.1))} \\ &= \frac{1}{2}[[a, \sigma b], c]. \end{aligned}$$

逆に半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} と \mathfrak{g} の involutive な自己同型 σ があって

$$\begin{aligned} \mathfrak{g} &= \mathfrak{g}(-1) + \mathfrak{g}(0) + \mathfrak{g}(1), && [\mathfrak{g}(j), \mathfrak{g}(k)] \subset \mathfrak{g}(j+k) \quad (\forall j, k), \\ \sigma \mathfrak{g}(j) &= \mathfrak{g}(-j) \quad (j = 0, \pm 1), && [\mathfrak{g}(-1), \mathfrak{g}(1)] = \mathfrak{g}(0) \end{aligned}$$

が成り立っているとする. ただし, $|k| > 1$ のとき, $\mathfrak{g}(k) = \{0\}$ とする. $V := \mathfrak{g}(-1)$ に次で 3 項積を定義する:

$$\{x, y, z\} := \frac{1}{2}[[x, \sigma y], z].$$

命題 10.7. この 3 項積で $V = \mathfrak{g}(-1)$ は JTS になる.

証明. (1) $\{x, y, z\}$ が x, z に関して対称なこと.

Jacobi の恒等式より, $x, y, z \in \mathfrak{g}(-1)$ のとき

$$\{x, y, z\} = \frac{1}{2}[[x, \sigma y], z] = -\frac{1}{2}[[\sigma y, z], x] - \frac{1}{2}[[z, x], \sigma y].$$

ここで $[z, x] = 0$ であるから

$$\{x, y, z\} = \frac{1}{2}[[z, \sigma y], x] = \{z, y, x\}.$$

(2) JT identity の証明. $a, b, x, y, z \in V = \mathfrak{g}(-1)$ とする. $\sigma[[b, \sigma a], y] = [[\sigma b, a], \sigma y]$ であるから,

$$\begin{aligned} ((a \square b)x) \square y - x \square ((b \square a)x) &= \frac{1}{4}[[[a, \sigma b], x], \sigma y] - \frac{1}{4}[x, [[\sigma b, a], \sigma y]] \\ &= -\frac{1}{4}[[[\sigma b, x], a], \sigma y] + \frac{1}{4}[x, [[a, \sigma y], \sigma b]]. \quad (*) \end{aligned}$$

最後の等号で, $[x, a] = 0$ および $[\sigma y, \sigma b] = 0$ を使った. ここで再び Jacobi の恒等式より

$$\begin{aligned} [[[\sigma b, x], a], \sigma y] &= -[[a, \sigma y], [\sigma b, x]] - [[\sigma y, [\sigma b, x]], a], \\ [x, [[a, \sigma y], \sigma b]] &= -[[a, \sigma y], [\sigma b, x]] - [\sigma b, [x, [a, \sigma y]]]. \end{aligned}$$

ゆえに,

$$\begin{aligned}
 (*) &= \frac{1}{4} [[\sigma y, [\sigma b, x]], a] - \frac{1}{4} [\sigma b, [x, [a, \sigma y]]] \\
 &= -\frac{1}{4} [[\sigma b, [x, \sigma y]], a] + \frac{1}{4} [\sigma b, [a, [\sigma y, x]]] && \text{(Jacobi の恒等式)} \\
 &= -\frac{1}{4} [[\sigma b, [x, \sigma y]], a] - \frac{1}{4} [[[x, \sigma y], a], \sigma b] && \text{(第 2 の書換え)} \\
 &= \frac{1}{4} [[a, \sigma b], [x, \sigma y]] && \text{(Jacobi の恒等式)} \\
 &= [a \square b, x \square y].
 \end{aligned}$$

よって JT identity を得る. □

§11. Derivations

以下しばらくの間, \mathfrak{g} を一般の Lie 代数 (実または複素) とする.

定義. $\text{Der}(\mathfrak{g}) := \{D \in \text{End}(\mathfrak{g}) ; T[x, y] = [Tx, y] + [x, Ty] (\forall x, y \in \mathfrak{g})\}$.

$\text{Der}(\mathfrak{g})$ を Lie 代数 \mathfrak{g} の微分代数と呼ぶ.

$T \in \text{Eng}(\mathfrak{g})$ のとき, 定義より明らかに

$$(11.1) \quad T \in \text{Der}(\mathfrak{g}) \iff [T, (\text{ad } x)] = \text{ad}(Tx) \quad (\forall x \in \mathfrak{g}).$$

例 11.1. $x \in \mathfrak{g}$ のとき, $\text{ad } x \in \text{Der}(\mathfrak{g})$ である. 実際, $x \mapsto \text{ad } x$ が \mathfrak{g} の表現であること (補題 10.1) より

$$[\text{ad } x, \text{ad } y] = \text{ad}[x, y] = \text{ad}((\text{ad } x)y) \quad (\forall x, y \in \mathfrak{g}).$$

(11.1) より, $\text{ad } x \in \text{Der}(\mathfrak{g})$ である. $\text{ad } x$ と書ける \mathfrak{g} の微分を内部微分 (inner derivation) と呼び, その全体を $\text{InnDer}(\mathfrak{g})$ で表す.

補題 11.2. (1) $\text{Der}(\mathfrak{g})$ は Lie 代数 $\mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ の部分 Lie 代数である.

(2) $\text{InnDer}(\mathfrak{g})$ は $\text{Der}(\mathfrak{g})$ のイデアルである.

証明. (1) $S, T \in \text{Der}(\mathfrak{g})$ とすると

$$\begin{aligned}
 [[S, T], \text{ad } x] &= -[[T, \text{ad } x], S] - [[\text{ad } x, S], T] \\
 &= -[\text{ad}(Tx), S] + [\text{ad}(Sx), T] && \text{(by (11.1))} \\
 &= \text{ad}(STx) - \text{ad}(TSx) && \text{(by (11.1))} \\
 &= \text{ad}([S, T]x).
 \end{aligned}$$

ゆえに $[S, T] \in \text{Der}(\mathfrak{g})$ である.

(2) (11.1) から明らか. □

定理 11.3. \mathfrak{g} を半単純 Lie 代数とする (\mathfrak{g} の Killing 形式 $B(x, y) := \text{tr}((\text{ad } x)(\text{ad } y))$ は非退化). このとき, $\text{Der}(\mathfrak{g}) = \text{InnDer}(\mathfrak{g})$.

証明. B は非退化であるので, \mathfrak{g} の双対ベクトル空間 (\mathfrak{g} 上の線型形式全体) \mathfrak{g}^* は次のようになる:

$$(11.2) \quad \mathfrak{g}^* := \{B(\cdot, y); y \in \mathfrak{g}\}.$$

さて $D \in \text{Der}(\mathfrak{g})$ が与えられたとし, 次の $F \in \mathfrak{g}^*$ を考える:

$$F(x) := \text{tr}(D(\text{ad } x)) \quad (x \in \mathfrak{g}).$$

そうすると, (11.2) より, 適当な $y_0 \in \mathfrak{g}$ を用いて, $F(x) = B(x, y_0) (\forall x \in \mathfrak{g})$ となる. このとき, 任意の $x, y \in \mathfrak{g}$ の対して

$$\begin{aligned} B(Dx, y) &= \text{tr}((\text{ad } Dx)(\text{ad } y)) && (B \text{ の定義}) \\ &= \text{tr}([D, \text{ad } x](\text{ad } y)) && (\text{by (11.1)}) \\ &= \text{tr}(D(\text{ad } x)(\text{ad } y)) - \text{tr}(D(\text{ad } y)(\text{ad } x)) \\ &= \text{tr}(D(\text{ad } [x, y])) = F([x, y]) \\ &= B([x, y], y_0) = B(y, [y_0, x]) \\ &= B((\text{ad } y_0)x, y). \end{aligned}$$

B は非退化であるから, $D = \text{ad } y_0$ である. □

以下 $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ を正定値 JTS とし, 内積はいつもの通り, $\langle v | v' \rangle = \text{tr}(v \square v')$ とする. §9 で定義した V の構造代数 $\mathbf{str}(V)$ を思い出そう:

$$\mathbf{str}(V) := \left\{ T \in \text{End}(V); \quad T\{x, y, z\} = \{Tx, y, z\} - \{x, T^*y, z\} + \{x, y, Tz\} \quad (\forall x, y, z \in V) \right\}.$$

$T \in \text{End}(V)$ のとき,

$$(11.3) \quad T \in \mathbf{str}(V) \iff [T, x \square y] = (Tx) \square y - x \square (T^*y) \quad (\forall x, y \in V).$$

また $V \square V := \text{span}\{x \square y; x, y \in V\}$ とおいていた. Lie 代数のときと同様に

$$\text{Der}(V) := \left\{ T \in \text{End}(V); \quad T\{x, y, z\} = \{Tx, y, z\} + \{x, Ty, z\} + \{x, y, Tz\} \quad (\forall x, y, z \in V) \right\}.$$

$T \in \text{End}(V)$ のとき, 明らかに

$$(11.4) \quad T \in \text{Der}(V) \iff [T, x \square y] = (Tx) \square y + x \square (Ty) \quad (\forall x, y \in V).$$

補題 11.4. (1) $\mathfrak{str}(V)$ は $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数で, $\mathfrak{str}(V)^* = \mathfrak{str}(V)$.

(2) $V \square V$ は $\mathfrak{str}(V)$ のイデアル.

(3) $\text{Der}(V)$ は $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数であって, $\text{Der}(V) = \{T \in \mathfrak{str}(V) ; T^* = -T\}$.

証明. (1) 部分 Lie 代数になることは補題 9.8 ですすでに証明済. 共役をとることで安定であることを示そう. $T \in \mathfrak{str}(V)$ とする. このとき, (11.3) の両辺を共役を考えると, $[A, B]^* = [B^*, A^*]$ に注意して

$$[y \square x, T^*] = y \square (Tx) - (T^*y) \square x.$$

すなわち,

$$[T^*, y \square x] = (T^*y) \square x - y \square (Tx).$$

$x, y \in V$ は任意であるから, $T^* \in \mathfrak{str}(V)$ である.

(2) 注意 9.7 より, $V \square V \subset \mathfrak{str}(V)$ である. イデアルであることは (11.3) より.

(3) まず $S, T \in \text{Der}(V)$ とする. Jacobi の恒等式と (11.4) より

$$\begin{aligned} [[S, T], x \square y] &= -[[T, x \square y], S] - [[x \square y, S], T] \\ &= -[(Tx) \square y + x \square (Ty), S] + [Sx \square y + x \square Sy, T] \\ &= (STx) \square y + (Tx) \square (Sy) + (Sx) \square (Ty) + x \square (STy) \\ &\quad - (TSx) \square y - (Sx) \square (Ty) - (Tx) \square (Sy) - x \square (TSy) \\ &= ([S, T]x) \square y + x \square ([S, T]y). \end{aligned}$$

ゆえに $\text{Der}(V)$ は $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数である. 次に $T \in \text{Der}(V)$ とする. (11.4) の両辺の trace をとって

$$0 = \text{tr}((Tx) \square y) + \text{tr}(y \square (Tx)) = \langle Tx | y \rangle + \langle x | Ty \rangle.$$

これは $T^* = -T$ であることを示す. このとき, (11.4) から (11.3) が出る.

逆に $T \in \mathfrak{str}(V)$ が $T^* = -T$ をみたすなら, (11.3) は (11.4) となる. \square

例 11.5. $a, b \in V$ のとき, $a \square b - b \square a \in \text{Der}(V)$. 実際, 補題 11.4 (2) より, $a \square b - b \square a \in \mathfrak{str}(V)$ であり, 明らかに歪対称であるので, 補題 11.4 より, $a \square b - b \square a \in \text{Der}(V)$ である. $a \square b - b \square a$ の 1 次結合で書ける V の微分を内部微分と呼び, $\text{InnDer}(V)$ で表す.

定理 11.6. (1) $\mathfrak{str}(V) = V \square V$.

(2) $\text{Der}(V) = \text{InnDer}(V)$.

証明. \mathfrak{g} を V から得られる Korchner–Tits の Lie 代数とする. \mathfrak{g} は半単純であったことを思いだそう (定理 10.6).

(1) $S \in \mathfrak{str}(V)$ とする. 次で与えられる \mathfrak{g} 上の線型作用素考える:

$$D(a + T + p_b) = Sa + [S, T] - p_{S^*b} \quad (a, b \in V, T \in V \square V).$$

ここで, 補題 11.4 (2) より, 確かに $[S, T] \in V \square V$ であることに注意. この D は \mathfrak{g} の微分である. 実際, 補題 9.4 と 9.9 より

$$D(a + T + p_b) = [S, a + T + p_b]_{\mathcal{P}(V)} \quad (\text{右辺は } \mathcal{P}(V) \text{ でのブラケット})$$

となっている. ゆえに定理 11.3 より, $X_0 = a_0 + T_0 + p_{b_0} \in \mathfrak{g}$ が存在して, $D = \text{ad } X_0$ となる. さて $a \in V = \mathfrak{g}(0)$ のとき

$$Sa = Da = [a_0 + T_0 + p_{b_0}, a] = T_0a + 2a \square b_0. \quad (*)$$

V 成分を比較して, $Sa = T_0a$ ($\forall a \in V$) が出るので, $S = T_0 \in \mathfrak{g}(0) = V \square V$ となる. ついでながら, 上記 (*) で, $\mathfrak{g}(0)$ 成分を比較すると, $a \square b_0 = 0$ が出, 両辺の trace をとることで, $b_0 = 0$ が出る. $S p_b$ を考えることで, $a_0 = 0$ も出る.

(2) $D \in \text{Der}(V)$ とすると, $D \in \mathfrak{str}(V)$ かつ $D^* = -D$ である. (1) より $D = \sum x_j \square y_j$ と書けるが, $D^* = -D$ なので

$$D = \frac{1}{2}(D - D^*) = \frac{1}{2} \sum (x_j \square y_j - y_j \square x_j) \in \text{InnDer}(V)$$

となって証明終わり. □

【余談】 Lie 代数 \mathfrak{g} が半単純でなくても, $\text{Der}(\mathfrak{g}) = \text{InnDer}(\mathfrak{g})$ となることがある. \mathfrak{g} として, 2次元の非可換な Lie 代数 \mathfrak{g} で, $[e, f] = f$ となる基底 e, f を持つものを考える. $\alpha, \beta \in \mathbb{R}$ として, $\text{ad}(\alpha e + \beta f)$ を基底 e, f に関して行列表示してみよう:

$$\text{ad}(\alpha e + \beta f)e = -\beta[e, f] = -\beta f, \quad \text{ad}(\alpha e + \beta f)f = \alpha[e, f] = \alpha f$$

であるから

$$\text{ad}(\alpha e + \beta f) = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ -\beta & \alpha \end{pmatrix}.$$

一方で, D を同様に行列表示して

$$D = \begin{pmatrix} p & q \\ r & s \end{pmatrix}$$

とすると, $De = pe + rf$, $Df = qe + sf$ である. \mathfrak{g} の微分ということより

$$Df = D[e, f] = [De, f] + [e, Df] = [pe + rf, f] + [e, qe + sf] = pf + sf.$$

最左辺において $Df = qe + sf$ であるから, $p = q = 0$. ゆえに

$$D = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ r & s \end{pmatrix} = \text{ad}(se - rd).$$

この \mathfrak{g} は半単純ではない. 実際,

$$\text{ad}(\alpha e + \beta f) \text{ad}(\alpha' e + \beta' f) = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ -\beta & \alpha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ -\beta' & \alpha' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ -\alpha\beta' & \alpha\alpha' \end{pmatrix}.$$

ゆえに, \mathfrak{g} の Killing 形式 B は

$$B(\alpha e + \beta f, \alpha' e + \beta' f) = \alpha\alpha'$$

となって, 明らかに非退化ではない: $B(f, \alpha' e + \beta' f) = 0$ が任意の $\alpha', \beta' \in \mathbb{R}$ に対して成り立つ.

余談ついでに, 2次元の非可換な Lie 代数は上記の \mathfrak{g} に限ることを示そう. 非可換であるから $[x, y] \neq 0$ となる元 x, y が存在する. 明らかにこの x, y は 1 次独立である. $[x, y] = \alpha x + \beta y$ とする. $\beta = 0$ のときは, $\alpha \neq 0$ であって,

$$[-\alpha^{-1}y, x] = x$$

であるから, $e := -\alpha^{-1}y$, $f = x$ とおけばよい. $\beta \neq 0$ のとき,

$$[x, [x, y]] = [x, \alpha x + \beta y] = \beta[x, y].$$

従って, $e := \beta^{-1}x$, $f := [x, y]$ とおくと, $[e, f] = f$. この e, f はもちろん 1 次独立である.

§12. スペクトルノルム

以下 $(V, \{., \cdot, \cdot\})$ は正定値な JTS とし, 内積をいつもの通り $\langle v | v' \rangle := \text{tr}(v \square v')$ で表す.

定義. 各 $v \in V$ に対して, $v \square v$ は半正定値な自己共役作用素であるから, 正定値な平方根 $(v \square v)^{1/2}$ が存在する. その作用素ノルムを $\|v\|_\infty$ で表す:

$$\|v\|_\infty := \|(v \square v)^{1/2}\|.$$

$\|v\|_\infty$ がノルムになることがわかるので, これを v のスペクトルノルムと呼ぶ.

注意 12.1. V 上の線型作用素 T の作用素ノルム $\|T\|$ は次で与えられる：

$$\|T\| := \sup_{\|v\| \leq 1} \|Tv\|.$$

$\|T\|$ はいわゆる C^* 条件をみたしている： $\|T^*T\| = \|T\|^2$. また、 T が自己共役ならば、 $\|T\|$ は T の固有値の絶対値の最大値に等しい。従ってまた、 $\|v\|_\infty = \|v \square v\|^{1/2}$ であることもわかる。

補題 12.2. $\|v\|_\infty$ は v のスペクトル分解における v の固有値の内、最大のものに等しい。特に $\|v\|_\infty = 0$ ならば $v = 0$ である。

証明. v のスペクトル分解を

$$v = \sum_{j=1}^m \lambda_j c_j \quad (0 < \lambda_1 < \cdots < \lambda_m)$$

とする。ここで、 c_1, \dots, c_m は互いに直交する non-zero tripotents であるので、 V は同時 Peirce 分解される (定理 4.5)：

$$V = \sum_{0 \leq i \leq j \leq m} V_{ij}.$$

ここで、 $V_i(c_j)$ を tripotent c_j の Peirce i 空間とすると、

$$\begin{aligned} V_{00} &= V_0(c_1) \cap \cdots \cap V_0(c_m) \\ V_{0j} &= V_{\frac{1}{2}}(c_j) \cap \left(\bigcap_{i \neq j} V_0(c_i) \right) && (j = 1, \dots, m), \\ V_{ij} &= V_{\frac{1}{2}}(c_i) \cap V_{\frac{1}{2}}(c_j) && (1 \leq i < j \leq m), \\ V_{ii} &= V_1(c_i) && (i = 1, \dots, m). \end{aligned}$$

このとき、 $v \square v = \sum_{j=1}^m \lambda_j^2 (c_j \square c_j)$. さて、 $\lambda_0 := 0$ とおくと

$$(v \square v)|_{V_{kl}} = \frac{1}{2}(\lambda_k^2 + \lambda_l^2) \text{Id}.$$

ゆえに $v \square v$ の固有値は、 $\{\frac{1}{2}(\lambda_k^2 + \lambda_l^2); 0 \leq k \leq l \leq m\}$. この内、最大のものは、 λ_m^2 に等しい。ゆえに補題が成り立つ。 \square

定理 12.3. $\|\cdot\|_\infty$ は V のノルムであつて、 $\|v^{2k+1}\|_\infty = \|v\|_\infty^{2k+1}$ ($k = 0, 1, 2, \dots$) が成り立つ。

証明. 三角不等式のみ問題. まず, 「球」

$$B := \{v \in V; \|v\|_\infty \leq 1\}$$

は凸集合であることを示そう. 実際 $u, v, x \in V$ とすると

$$\begin{aligned} \langle (u \square v)x | x \rangle &= \langle (x \square v)u | x \rangle = \langle u | (v \square x)x \rangle \\ &= \langle u | (x \square x)v \rangle = \langle (x \square x)u | v \rangle \\ &\leq \langle (x \square x)u | u \rangle^{1/2} \langle (x \square x)^{1/2}v | v \rangle^{1/2} \\ &= \langle (u \square u)x | x \rangle^{1/2} \langle (v \square v)x | x \rangle^{1/2} \\ &\leq \|(u \square u)x\|^{1/2} \|(v \square v)x\|^{1/2} \|x\| \\ &\leq \|u\|_\infty \|v\|_\infty \|x\|^2. \end{aligned}$$

これより,

$$(12.1) \quad u, v \in B \implies \langle (u \square v)x | x \rangle \leq \|x\|^2.$$

さて, $0 \leq t \leq 1$ とし, $w = tu + (1-t)v$ を考えると, (12.1) より

$$\begin{aligned} \|(w \square w)^{1/2}x\|^2 &= \langle (w \square w)x | x \rangle \\ &= t^2 \langle (u \square u)x | x \rangle + t(1-t) \langle (u \square v)x | x \rangle + t(1-t) \langle (v \square u)x | x \rangle \\ &\quad + (1-t)^2 \langle (v \square v)x | x \rangle \\ &\leq (t^2 + 2t(1-t) + (1-t)^2) \|x\|^2 \\ &= \|x\|^2. \end{aligned}$$

これは $\|(w \square w)^{1/2}\| \leq 1$ であることを示している. ゆえに B は凸集合である.

さて一般に $u, v \in V$ とする. B の凸性より

$$\begin{aligned} \|u + v\|_\infty &= (\|u\|_\infty + \|v\|_\infty) \left\| \underbrace{\frac{\|u\|_\infty}{\|u\|_\infty + \|v\|_\infty} \frac{u}{\|u\|_\infty} + \frac{\|v\|_\infty}{\|u\|_\infty + \|v\|_\infty} \frac{v}{\|v\|_\infty}}_{\in B} \right\| \\ &\leq \|u\|_\infty + \|v\|_\infty. \end{aligned}$$

ゆえに三角不等式が成立する.

次に $v = \sum_{j=1}^m \lambda_j c_j$ ($0 < \lambda_1 < \dots < \lambda_m$) を v のスペクトル分解とすると, $v^{2k+1} =$

$\sum \lambda_j^{2k+1} c_j$ であるから, 補題 12.2 より

$$\|v^{2k+1}\|_\infty = \lambda_m^{2k+1} = \|v\|_\infty^{2k+1}$$

となって証明終わり. □

例 12.4. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ で考える. 各 $T \in \text{Mat}(p \times q, \mathbb{R})$ を線型写像 $T: \mathbb{R}^q \rightarrow \mathbb{R}^p$ と見る.

$${}^t T T = \sum_{j=1}^m \mu_j P_j \quad (0 < \mu_1 < \cdots < \mu_m)$$

を自己共役作用素 ${}^t T T: \mathbb{R}^q \rightarrow \mathbb{R}^q$ のスペクトル分解とする. ここで, P_j は固有値 μ_j に対する固有空間 E_j への直交射影作用素 $\mathbb{R}^q \rightarrow E_j$ である. C_j を, 始空間が E_j , 終空間が $T E_j$ である部分的等長写像とすると, 例 4.3 で示したように,

$$T = \sum_{j=1}^m \sqrt{\mu_j} C_j$$

が, JTS の意味での T のスペクトル分解である. このとき, 補題 12.2 と注意 12.1 より

$$\|T\|_\infty = \sqrt{\mu_m} = \|{}^t T T\|^{1/2} = \|T\|.$$

ゆえにこの例では, スペクトルノルムは, 作用素ノルムに等しい.

§13. Hermitian JTS

V を複素ベクトル空間とする. 今, 実 3 重線型写像 $\{\cdot, \cdot, \cdot\}: V \times V \times V \rightarrow V$ が与えられていて, $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ は, 実 JTS をなしているとする.

定義. $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ が **Hermitian** であるとは, $\{x, y, z\}$ が, x, z に関して \mathbb{C} 線型, かつ y に関して \mathbb{C} 反線型となっていることである.

今までと同様に, 作用素 $(x \square y)z = \{x, y, z\}$, $P(x)y = \{x, y, x\}$ を定義すると, $x \square y$ は \mathbb{C} 線型な作用素であるが, $P(x)$ は \mathbb{C} 反線型な作用素である. また, $x \square y$ は, x については \mathbb{C} 線型に, y については \mathbb{C} 反線型に依存することに注意.

定義. Hermitian JTS $(V, \{\cdot, \cdot, \cdot\})$ が正定値 であるとは, \mathbb{C} 線型写像のトレース $\text{tr}(v \square v')$ が, V に Hermitian な内積を与えることである.

例 13.1. $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{C})$ を考える. V には,

$$\{x, y, z\} := \frac{1}{2}(xy^*z + zy^*x)$$

で 3 項積が入り, この 3 項積で Hermitian JTS になっている. そして V は

$$(x|y)_{\text{tr}} := \text{tr}({}^t x \bar{y}) = \text{tr}(\bar{y} {}^t x) = \sum_{i=1}^p \sum_{j=1}^q x_{ij} \bar{y}_{ij}$$

によって Hermitian な内積を持っている. 例 3.5 と全く同じ計算で

$$\text{tr}(x \square y) = \frac{p+q}{2} (x|y)_{\text{tr}}$$

がわかるので, V は正定値である.

以下 $(V, \{ \cdot, \cdot, \cdot \})$ を正定値な Hermitian JTS とする. このとき, 任意の $x \in V$ に対して, $x \square x$ は半正定値な自己共役作用素になるので, これまでと全く同様な理論構成ができる.

c を V の極大 tripotent とし, $V = V_{\frac{1}{2}}(c) + V_1(c)$ を対応する V の Peirce 分解とする. このとき, $V_1(c)$ は $a \cdot_c b := \{a, c, b\}$ で複素 Jordan 代数になる. そして, $a \mapsto P(c)a = \{c, a, c\} =: a^*$ は, $V_1(c)$ に実 Jordan 代数としての involutive な自己同型であり, 明らかに \mathbb{C} 反線型である.

$$A(c) := \{a \in V_1(c); a^* = a\}$$

は $V_1(c)$ の実型 (複素化が $V_1(c)$ に等しい) で, やはり Euclid 型の Jordan 代数になる. そこで, $\Omega := \text{Int}\{a \cdot_c a; a \in A(c)\}$ とおくと, Ω は自己双対な開凸錐になっている.

例 13.2. 先の例 $V = \text{Mat}(p \times q, \mathbb{C})$ で考える. 極大 tripotent としては, 例 7.5 と同様に $c = (I_p | O)$ を考える. 対応する Peirce 空間は

$$V_1(c) = (\text{Mat}(p \times p, \mathbb{C}) | O), \quad V_{\frac{1}{2}}(c) = (O | \text{Mat}(p \times (q-p), \mathbb{C})).$$

となる. 例 7.5 と同様にして, $a \in \text{Mat}(p \times p, \mathbb{C})$ のとき

$$(a | O)^* = (a^* | O)$$

であるから

$$A(c) = (\text{Herm}(p \times p, \mathbb{C}) | O).$$

このとき, $\Omega = \text{Herm}(p \times p, \mathbb{C})^{++}$ (正定値) となる.

一般の Hermitian JTS $(V, \{ \cdot, \cdot, \cdot \})$ に戻り, c を V の極大 tripotent とする. 各 $a \in V_1(c)$ に対して,

$$\varphi(a)x := 2\{a, c, x\} \quad (x \in V_{\frac{1}{2}}(c))$$

とおくと, $\varphi(a) \in \text{End}(V_{\frac{1}{2}}(c))$ であり, $V_1(c) \ni a \mapsto \varphi(a) \in \text{End}(V_{\frac{1}{2}}(c))$ は, 複素 Jordan 代数 $V_1(a)$ の $*$ 表現になっている:

$$\begin{cases} (1) \varphi(a \cdot_c b) = \frac{1}{2}(\varphi(a)\varphi(b) + \varphi(b)\varphi(a)), \\ (2) \varphi(a^*) = \varphi(a)^* \quad (\varphi(a) \text{ の共役作用素}). \end{cases}$$

各 $x, y \in V_{\frac{1}{2}}(c)$ に対して

$$(\varphi(a)x | y) = (a | \Phi(y, x)) \quad (\forall a \in V_1(c))$$

が成り立つように $\Phi(y, x) \in V_1(c)$ を定めると, 命題 7.4 (1) の証明から,

$$\Phi(y, x) = 2\{y, x, c\} \quad (y, x \in V_{\frac{1}{2}}(c))$$

がわかる. このとき, $\Phi: V_{\frac{1}{2}}(c) \times V_{\frac{1}{2}}(c) \rightarrow V_1(c)$ は, sesqui-linear (第 1 変数に対して \mathbb{C} 線型, 第 2 変数に関して \mathbb{C} 反線型) で Hermitian な写像である:

$$\Phi(x, y) = \Phi(y, x)^*.$$

さらに, $x \neq 0$ ならば, $\Phi(x, x) \in \overline{\Omega} \setminus \{0\}$ (この性質を Ω -positive であるという) となる. 以上の性質から, Siegel 領域 (複素の領域になる)

$$D(\Omega, \Phi) := \{x + a; x \in V_{\frac{1}{2}}(c), a \in V_1(c), \text{Im } a - \Phi(x, x) \in \Omega\}$$

が定義される. V のスペクトルノルム $\|v\|_{\infty}$ も同様に定義され, その開単位球

$$\mathcal{D} := \{z \in V; \|z\|_{\infty} < 1\}$$

を考えると, 「Cayley 変換」によって, $D(\Omega, \Phi)$ と \mathcal{D} とは, biholomorphic に写り合う.